

年 報

—昭和 61 年 度—

VOL.5

昭和 63 年 1 月

序

当長野市立博物館の昭和61年4月
から昭和62年3月までの活動と、御
利用の状況をまとめ、ここに年報第
5号を発行します。

昭和63年1月
長野市立博物館



2	茶臼山自然史館一年の歩み	〈唐沢〉	2
II	事業報告		3
1	展示活動	〈山口〉	3
2	天体学習室	〈大蔵〉	17
3	調査研究収集活動	〈山口・青木・唐沢・藤森〉	20
4	教育普及活動	〈山口・大蔵・唐沢・和田・奈須野〉	26
III	博物館収蔵資料		31
1	購入資料	〈山口・唐沢・奈須野〉	31
2	寄贈資料	〈安室・唐沢・藤森・奈須野〉	33
3	寄託資料	〈山口・安室・唐沢・藤森〉	44
IV	博物館管理・運営		46
1	昭和61年度歳出予算概要	〈山口〉	46
2	管理委託業務	〈山口〉	46
3	入館者状況	〈佐野・山口・大蔵・両角〉	47
4	利用状況	〈奈須野〉	51
V	彙報	〈山口〉	52
1	長野市立博物館協議会		52
2	組織		53
VI	講演会収録	〈奈須野〉	54
1	古代の鏡—靈魂を籠める器物—		54
2	屋敷神をめぐって		61

I 博物館日誌

1 長野市立博物館1年の歩み

- 4月2・3日 企画展「漁とくらし」借用資料返却のため出張（山口・大蔵・安室・唐沢）
- 4月6日 川中島バスの史跡めぐり観光バスが運行を開始
- 4月10日 昭和60年度新収蔵資料展（考古の部）開催（5月11日まで）
- 4月14日 清水寺鉄鋏形レプリカ作製のため搬入
- 4月16日 広井進一文化庁主任調査官立会いのもとに鉄鋏形複製作業に入る
- 4月19日 鉄鋏形型どり作業完了
- 4月20日 森の杏が見頃
- 4月23日 茨城県下館市議員一行視察
- 4月29日 おだやかな大型連休の一日で、公園内はにぎわう
- 4月30日 ハレー彗星の尾を今までになく、はっきり観測する
- 5月7日 石川・平久保の埋蔵文化財緊急調査着手
- 5月10日 長野県博物館協議会総会に館長出席（丸子町）・春の天体教室開講
- 5月13日 収蔵資料展（歴史・民俗の部）開催（6月15日まで）・日本博物館協会総会に館長出席（東京）
- 5月14日 明治大学大室古墳群調査団来長
- 5月22日 千葉県上総地区監査委員一行28名、福岡県田川市議員一行7名視察
- 5月29日 三重県教育委員会文化課一行視察
- 5月31日 市政記念の庫除幕式挙行
- 6月3日 大桑村教育委員会一行3名視察
- 6月4日 北海道忠類村教育委員会一行3名来館
- 6月7日 夏のプラネタリウム「火星大接近」投影開始
- 6月8日 池の中には孵化したばかりの小魚が泳ぐ
- 6月12日 企画展資料調査のため豊田村佐藤博物館へ出張（副館長・青木・千野）
- 6月16日 議会総務文教委員会に副館長出席
- 6月21日 プラネタリウム「茶臼山の名月」投影開始
- 7月9日 みどりの見学来館
- 7月10日 副館長に社会教育課兼務辞令発令
- 7月12日 鉄鋏形複製作業完了
- 7月15日 夏の天体教室開講
- 7月17日 流山市議会議員一行視察
- 7月20日 企画展「鏡の文化」開催（8月31日まで）
- 7月21日 深沢辰雄館付発令
- 7月22日 博物館実習生3名受入
- 7月30日 東京学芸大学市川健夫先生来館・みどりのちびっこ見学来館
- 7月31日 福山市議会議員一行視察
- 8月3日 明治大学大塚初重先生・岡山県立博物館高橋学芸課長来館
- 8月5日 堺市議会議員一行視察
- 8月8日 文化庁河原純之調査官来長
- 8月10日 企画展記念講演会「古代の鏡一靈魂を籠める器物」（講師 桐原健県史編さん委員）
- 8月20日 地附山上池の平古墳発掘調査開始
- 8月21日 岐阜市議会議員一行視察
- 8月26日 岡山市議会議員一行視察
- 8月27日 旭川市議会議員一行15名視察・夏の天体教室開講
- 9月1日～10日 企画展借用資料返却
- 9月2日～10月2日 特別展資料調査・借用搬入
- 9月3日 太田区立郷土博物館長一行視察
- 9月6日 秋のプラネタリウム「茶臼山の名月」投影開始
- 9月7日 古戦場まつり開催
- 9月12日 みどりの見学来館
- 9月19日 議会総務文教委員会に副館長出席
- 9月23日 開館5周年記念日のため無料開放・常設展示室鉄鋏形展示除幕式挙行
- 10月5日 特別展「のりもの今昔」開催（11月24日まで）
- 10月7日 相模原市議会議員一行来館

田市議会及び教育委員一行21名視察	2月15日	正回展「展本とくらし」開催（5月20日まで）
1月6日 加茂市教育委員一行視察	2月22日	プラネタリウムコンサート開催
1月13日 大津市教育委員会一行4名視察	2月28日	2月中の入館者数が前年及び前々年を上まわる
1月14日 長岡市教育委員会一行視察	3月4日	公園内の工事にかかる徳本塚の実測と記録作業を実施
11月15日 プラネタリウムコンサート開催	3月5日	博物館協議会開催
1月17日 石川条里の発掘調査開始	3月7日	春のプラネタリウム「星空のマリオ」投影開始
1月19日 四日市市議会特別委員会一行視察	3月18日	議会産業教育委員会に副館長出席
1月20日 四日市市教育委員会一行視察	3月19日	つばめの姿が早くもみえる
11月25日～12月5日 特別展借用資料返却	3月21日	企画展記念講演会「屋敷神をめぐる」(講師 佐々木勝千葉工商高校教諭)
12月6日 冬のプラネタリウム「アルゴ一船いざ出航」投影開始	3月22日	今年一番の人出で公園内にもぎわう(357人)
12月16日 議会産業教育委員会に副館長出席	3月29日	プラネタリウムコンサート開催
12月18日・21日 しめ縄教室開講	3月30・31日	企画展借用資料返却
12月21日 石家荘市人代常務委員会代表一行7名来館		

2 茶臼山自然史館1年の歩み

4月1日 久保田仁太郎が退職、後任に松田幹雄が着任	8月3日 夏の地質教室開講（茶臼山の化石採集とクリーニング）
4月15日 豊橋市立博物館職員5名・名古屋大学糸魚川淳二教授来館	8月29日 三重県津市議会議員一行3名視察
4月23日 生島高俊氏(市内桐原)桂化木化石を寄託(2点)	9月5日 富山県高岡市議会議員一行3名視察
4月24日 安茂里にて仏頭石採集	9月9日 野尻湖博物館近藤洋一学芸員来館
4月25日 小川村老友会44名来館	9月20日 戸隠村教育長ほか2名来館
4月28日 中野市立歴史民俗資料館よりナウマンゾウ臼歯を借用	9月23日 開館記念日のため無料開放
5月2日 中御所老人クラブ50名来館	10月3日 長野市議会議員3名来館
5月9日 新潟県十日町市議会議員一行22名視察	10月12日 秋の地質教室（信更町犀川流域）
5月23日 野尻湖友の会会員13名来館	10月15日 小鍋地区にて化石採集
6月4日 北海道忠類村教育委員長・教育長ほか1名来館	11月6日 高山市議会議員一行ほか53名来館
6月8日 長野市解放子供会10名来館	12月10日・17日 戸隠村川下にて化石採集
6月12日 芹田公民館24名来館	2月10日 「化石の故郷」コーナーに写真パネル交換設置
6月15日 野尻湖友の会39名来館	2月25日 河東山地にて岩石採集
7月6日 一万人目の入館者に記念品贈呈	2月13日 東京学芸大学稲森教授来館
7月14日 茶臼山自然史館がディスプレイデザイン年賞に入賞	3月13日 中野市歴史民俗資料館よりナウマンゾウ臼歯を借用
7月20日 芹田公民館27名来館	3月14日 長野県史編さん委員6名来館
7月24日 豊田市議会議員一行4名視察	3月28日 信州大学田中邦雄教授・阿南町化石博物館職員5名来館
7月30日 ちびっこ見学会44名来館	

II 事業報告

1 展示活動

1) 長野市立博物館常設展示

常設展示室における展示の構想・構成等は開館以来（昭和56年9月）基本的に変わっていない。しかし、主題にからむ重要な資料と考えられるものについては、随時追加展示を行っている。本年度は3件の資料を追加した。

●「善光寺とその信仰」コーナー

善光寺境内出土古瓦（善光寺事務局所蔵）を浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスD地点5号住居出土の軒平瓦（いわゆる善光寺瓦）と展示替えをした。

●「慈悲のまなざし」コーナー

長野市若穂保科清水寺所蔵鉄鋏形のレプリカを新たに製作し、展示した。この鉄鋏形は現存する鋏形では日本最古のもので、重要文化財に指定されている。

●「川中島の戦い」コーナー

大日方茂雄氏（松代町）所蔵の武田晴信（信玄）の条目の写真及び解説を展示した。この条目は武田信玄の東北信進出にあたって、大日方一族が信玄より受けたもの。

2) 茶臼山自然史館常設展示

常設展示の構想・構成及び展示案内導線は、開館（昭和60年9月）当時と基本的には変わっていない。ただし、開館以来の収蔵資料のうち、寄贈・寄託展示資料に代わるものがある場合には展示替えをし、また、主題にからむ重要な資料と考えられるものについてはその都度追加展示をし充実をはかってきた。その数は本年度14件にのぼった。また、来館者の要望により教室にも展示してきた。

以下本年度実施した展示替え・展示追加は下記のとおりである。

- | | |
|-----------|--------------------------|
| （古生代） | 中国産の三葉虫の化石を展示 |
| | 南極の石（大理石、チャーンカイト）を追加展示 |
| （新生代） | 現世のサメの歯を化石と比較のため展示 |
| | デスモスチルスの臼歯の横に全体像写真設置 |
| （化石コーナー） | カキ包含岩石にプラスチックケース設置 |
| （茶臼山の時代） | 地附山地すべりとの関連から流紋岩を展示 |
| （化石の故郷） | 茶臼山上空の写真に交換、その前に地形模型を展示 |
| | ステゴドン象模型展示（昭和62年度4月設置予定） |
| （ゾウのきたころ） | ナウマン象右下大臼歯（中野市産）レプリカ展示 |

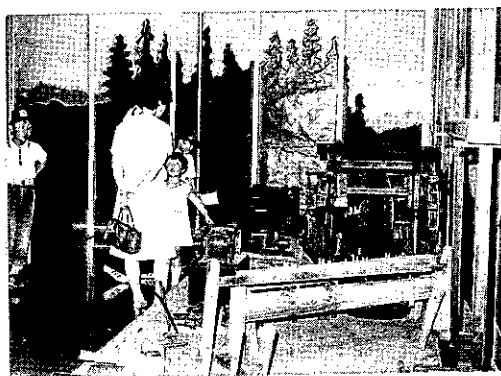
(2) 趣旨 昭和100年反に可相 可相 解ハ
れた資料を一般に展示公開するために企画した。

(3) 展示構成と内容

- ①考古 塩崎遺跡群・浅川扇状地遺跡群
(B・C・D地点)・旭町遺跡出土の埋蔵文化財を一堂に展示。
- ②民俗 農耕・養蚕・交通・運輸・手工・衣・食・住・年中行事などのコーナーに分けて展示した。
- ③歴史 佐久間象山購入資料のうちの一部を展示した。
各部門の内容については年報Vol.4を参照願いたい。



「考古」のコーナー



「手工・諸織・機織り」コーナー

(B) 第13回企画展「鏡の文化」

- (1) 期間 昭和61年7月20日～8月31日
(実質開館日数37日)
- (2) 出版物 A 2判多色刷ポスター
A 4判両面刷二ツ折パンフレット
B 5判展示図録52頁 頒価500円
- (3) 趣旨 日常生活において身近な存在としての鏡は、古来より人の姿を写し出す化粧道具・調度品として愛用されてきた。また、光明を反射して、物の形を写し出すという神秘性から、「呪力を有するもの」として鏡が特別視され、宗教や信仰と強く結びついてきた点もその特性としてあげることができる。

この企画展では、こうした鏡の特性に着目し、鏡の用途の歴史的な理解をとおして、更に現代から未来への鏡の利用についても概観する。

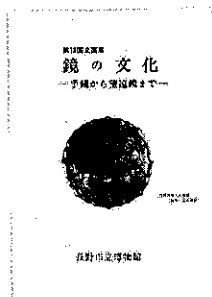
この企画展では、こうした鏡の特性に着目し、鏡の用途の歴史的な理解をとおして、更に現代から未来への鏡の利用についても概観する。

第13回企画展
鏡の文化
手鏡から望遠鏡まで

86 7月20日
～8月31日
午前9時～午後4時30分
(休館日 毎週月曜日)

長野市立博物館
長野市小島田町八幡原史跡公園内
☎0262-84-8011

特別展
「近代統一国家の鏡像」
8月10日 午後2時
開館 閉館
(土曜日は開館)



ポスター・パンフレット・図録

(4) 展示構成

考古・民俗の資料と共に、理工学
分野からの資料もまじえて、多面的
な鏡の特性をみていただいた。また、
「現代から未来へ」のコーナーでは、
見て触れることのできる体験的要素
を多く取り入れた。

①日本における鏡の変遷

②墳墓に埋納された鏡

③信仰と結びついた鏡

シャーマンの用いた鏡

神へ供えた模造鏡

御霊鎮の鏡

御神体となった鏡

④調度品としての鏡

⑤現代の民間信仰と鏡

⑥鏡の製作と研磨

⑦現代から未来へ

(5) 資料点数 180点

(6) 催物

講演 「古代の鏡

—靈魂を籠める器物—

桐原健氏（県史編纂委員）

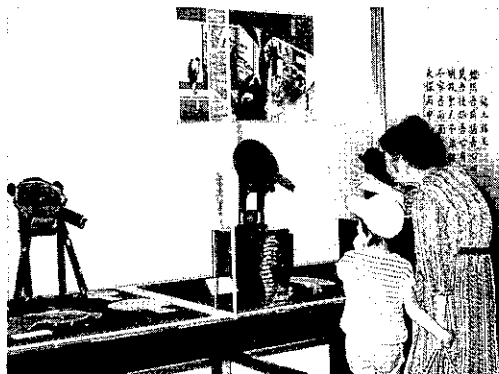
8月10日

ビデオフィルム

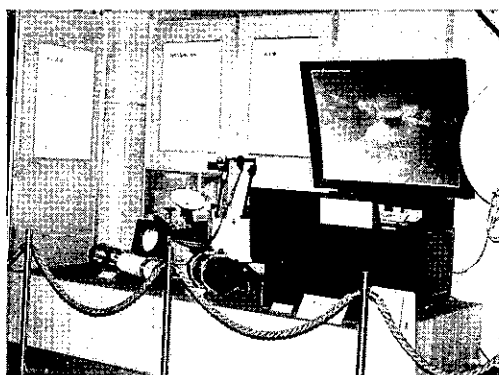
「和鏡」（カラー44分）

京都府伝統産業記録映画より

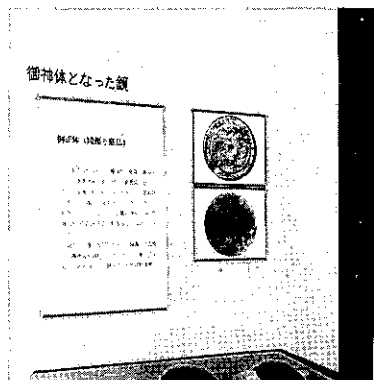
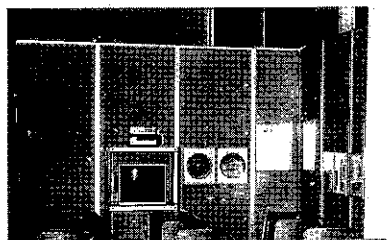
京都府提供



「調度品としての鏡」コーナー



「現代のさまざまな鏡」コーナー



1	万石虎足四神鏡	勿里八子寺古子博物館		45	草花双鳥鏡	"	
2	内行花文鏡	布制神社(長野市)	長野県宝	46	菊花飛雀鏡	"	
3	"	"	"	47	秋草飛雀鏡	"	
4	異体字日月鏡内行花文鏡	"	"	48	経筒・刀子	"	
5	珠文鏡	"	"	49	梅樹飛雀鏡・外容器	更埴市郡自治会	
6	"	"	"	50	瑞雲双鷺八花鏡	長野県教育委員会	
7	変形文鏡	"	"	51	双雀鏡	"	
8	珠文鏡	川柳將軍塚保存会	"	52	松鶴鏡	"	
9	獸形鏡	長野市立博物館	長野市指定	53	網代地双鳥鏡	長野市立博物館	
10	内行花文鏡	"		54	角谷一主作本草文及鳥白銅鏡	大阪市立博物館	
11	方格規矩四神鏡	須坂市立博物館		55	角谷一主作牡丹双鳳文八棱鏡	"	
12	内行花文鏡	飯田市立竜丘小学校		56	秋草水禽文様鏡	塩尻市小野神社	
13	二神二獸鏡	"		57	松葉散双雀鏡	"	
14	四獸鏡	"		58	芦文様鏡	"	
15	四神四獸鏡	原五郎(喬木村歴史民俗資料館)		59	蓬萊鏡	長野市立博物館	
16	六獸鏡	岡谷市湊小坂区(岡谷美術考古館)		60	菊花散双雀鏡	"	
17	内行花文鏡(?)	高森町歴史民俗資料館		61	環花双鳥八棱鏡	茅野市尖石考古館	
18	珠文鏡	"		62	"	"	
19	乳文鏡	宝蔵寺(丸子町郷土博物館)		63	"	"	
20	振文鏡	長谷八幡宮(長野市)		64	"	松本市立博物館	
21	"	高井舟着神社(中野市)		65	瑞花双鳳八棱鏡	木曽福島郷土館	
22	"	長野市立博物館		66	瑞花双鳥八棱鏡	木祖村地藏尊保存会	
23	八乳鋸齒文鏡	中野市七瀬区		67	八棱鏡	箕輪町郷土博物館	
24	鈴鏡を腰につけた巫女	高田儀三郎(埼玉県立博物館)	重要文化財	68	瑞花双鳥八棱鏡	栄村教育委員会	
25	鈴鏡を腰に釣る女子像	東京国立博物館(原品)		69	菊花飛雀鏡	伊那弥生ヶ丘高校	
26	(複製)	群馬県立歴史博物館		70	花形湖州鏡	健御名方富命彦神別神社	
27	十鈴鏡	長野総合博物館	重要文化財	71	象形文字文鏡	松尾邦夫(信州新町)	
28	六鈴鏡	田中亮(群馬県立歴史博物館)		72	瑞花双鳥八棱鏡	平出遺跡考古博物館	
29	"	産泰神社(群馬県)		73	銅製御正体	辰野町七蔵寺	
30	"	中込久雄(")	未出品	74	菩薩御正体	白馬村神明宮	重要美術品
31	土製模造鏡	更埴市教育委員会		75	大日如来御正体	"	"
32	入山峠出土石製模造品	軽井沢町歴史民俗資料館		76	姿見鏡衛立	真田宝物館	
33	"	渡辺重義(軽井沢町)		77	鏡立	"	
34	雨境峠出土祭祀遺物	立科町歴史民俗資料館		78	"	"	
35	土製模造鏡	坂城町立南条小学校		79	葵紋柄鏡	"	径18.0長28.5
36	"	長野県教育委員会					

30	〃	〃	径24.2長34.0	116	桔梗紋松竹鶴柄鏡	〃	径23.8長33.8
31	六文銭紋柄鏡	真田宝物館		117	高砂文字入松竹鶴龜柄鏡	〃	径18.1長27.1
32	鏡台	上田市立博物館		118	松竹鶴龜柄鏡	〃	径17.5長26.6
33	鏡台・鏡箱	佐藤博物館		119	福寿文字入柄鏡	〃	径16.9長24.8
34	鏡箱・代粧道具一式	上田市立博物館		120	玉川文字入 〃	〃	径16.8長25.2
35	鏡袋	真田宝物館		121	万亀文字入 〃	〃	径24.0長33.8
36	鏡箱	〃		122	松竹鶴龜柄鏡	〃	径23.8長33.8
37	〃	佐藤博物館		123	松竹南天鶴龜柄鏡	〃	径16.8長24.9
38	蓬萊鏡	堀川神社(上田市立信濃国分寺資料館)		124	松竹鶴龜柄鏡	〃	径17.2長26.2
39	〃	〃		125	満月文字入水草鶴柄鏡	〃	径17.8長27.3
40	和鏡	〃		126	樓閣山水柄鏡	〃	径13.4長23.1
41	〃	〃		127	若松文字入松竹柄鏡	〃	径23.2長23.1
42	蓬萊鏡	佐藤博物館		128	樓閣山水柄鏡	〃	径13.6長24.0
43	〃	上田市立博物館		129	南天柄鏡	〃	径17.6長26.9
44	花菱文鏡	長野市立博物館		130	丸に牡丹紋柄鏡	〃	径17.6長26.9
45	蓬萊鏡	〃		131	蓬萊文字入柄鏡	〃	径17.7長26.4
46	梅花双雀鏡	〃		132	七宝花角紋柄鏡	〃	径15.2長25.2
47	樓閣山水鏡	〃		133	扇紋柄鏡	〃	径14.0長21.6
48	橘松梅柄鏡	佐藤博物館	径17.3長26.6	134	高砂文字入松鶴柄鏡	〃	径22.7長31.5
49	竹梅虎 〃	〃	径14.6長23.4	135	方鏡	〃	縦14.7横 5.8
50	松双鶴 〃	〃	径17.9長28.8	136	蓬萊文字入柄鏡	長野市立博物館	径20.0長21.1
51	高砂文字入松竹鶴龜柄鏡	〃	径17.2長26.2	137	松竹文字入 〃	〃	
52	松竹鶴龜柄鏡	〃	径17.0長25.6	138	柄鏡	〃	径14.0長21.5
53	松梅老柄鏡	〃	径16.7長24.9	139	透彫蓬萊鏡	両角和子(長野市)	径12.1
54	松竹鶴龜柄鏡	〃	径14.6長25.3	140	〃	座光寺厚(喬木村)	径12.2
55	〃	〃	径17.9長28.0	141	魔鏡・鏡台	山本鳳龍(京都市)	
56	八橋文字入水草柄鏡	〃	径24.2長34.7	142	三角縁神歌鏡(複製)	内田俊秀(奈良市)	
57	高砂文字入松鶴龜柄鏡	〃	径21.0長30.3	143	浄玻璃の鏡	善光寺	
58	十二菊紋柄鏡	〃	径13.8長23.5	144	ドブソニアン天体望遠鏡	前橋至誠堂	
59	松竹梅鶴龜柄鏡	〃	径18.2長28.0	145	カーブミラー	(株)矢木商事	
60	剣花菱紋柄鏡	〃	径15.4長25.4	146	反射板(大,小,発光)	長野市	
61	寿文字入菊花柄鏡	〃	径18.0長27.4	147	バックミラー類	〃	
62	松竹南天鶴龜柄鏡	〃	径16.8長25.4	148	平面鏡他	長野市理科教育センター	
63	松橘菊花柄鏡	〃	径17.5長26.6	149	放送衛星受信装置	NHK長野放送局	
64	隅切角亀紋柄鏡	〃	径17.3長26.7	150	鏡製作工程一式	大阪市立博物館	
65	南天柄鏡	〃	径17.8長27.8				

- (3) 趣旨 陸上・海上・河川における
人力（ショイコ・手こぎ船・
自転車など）、畜力（中馬・馬
車など）、風力（帆船・通船な
ど）、動力（蒸気機関車など）
の面から、人及び物の運搬手
段としてののりものを取り上
げ、近世から現代に至るうつ
りかわりの様子を探る。また
長野盆地の私営交通を取り上げ、身近な足元についても概観する。

(4) 展示構成

- ① 長野の交通
- ② 人の力
- ③ 動物の力
- ④ 和 船
- ⑤ 黒船
- ⑥ 自転車とりやカー
- ⑦ 人力車
- ⑧ かご
- ⑨ 汽車

(5) 資料点数 121点

(6) 催物

見学会 「保存機関車めぐり」 講師

小林宇一郎氏（鉄道史学会会員）

映画 「鉄道の移り変り」カラー22分

「鉄道の開通」 白黒15分

長野市視聴覚教育センター

ビデオ 「蒸気機関車」

長野市視聴覚教育センター

「鉄道の近代化」

長野鉄道管理局

開館5周年記念
特別企画展
のりもの今昔



長野市立博物館



10月5日～11月24日

午前9時～午後4時半

休館日は休館します

一般 200円

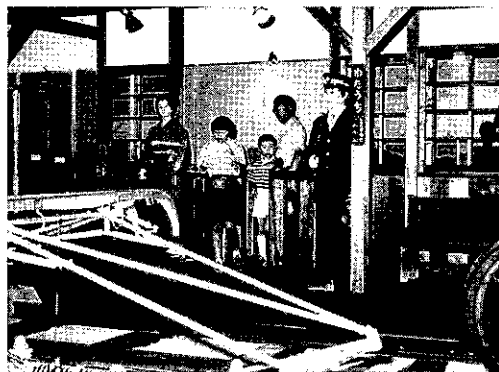
高校生 100円

小学生 50円

長野市立博物館

長野市小島田町八幡原公園内・交通 川中島バス停道徳代村八幡原下車

ポスター・パンフレット・図録



長野の交通—河東線綿内駅—



人力車・かご

(7) 展示資料目録

(敬称略)

No.	資 料 名	所 有 者
陸上の運輸 一人力・畜力一		
1	町 駕 籠	当 館 蔵
2	〃	関川喜八郎(長野市)蔵
3	山 駕 籠	当 館 蔵
4	車付駕籠	光徳禅寺(南木曾町)蔵
5	シャフト式自転車	和田康雄(長野市)寄託
6	オーディナリー型自転車	日本自転車普及協会蔵
7	三菱十字号	〃
8	ピアス号	〃
9	修 羅	八坂神社(松本市)蔵
10	モ ッ コ	上野千鶴子(長野市)寄託
11	木曾式運材梁	上松町歴史民俗資料館
12	コウジボテ	当 館 蔵
13	テンビン棒・ワラボテ	〃
14	背負子・荷杖	〃
15	背負子・荷杖(歩荷)	糸魚川市歴史民俗資料館蔵
16	両 掛 け	酒井英知(長野市)寄贈
17	大 八 車	当 館 蔵
18	リヤカー	〃
19	人 力 車	善光寺大勧進(長野市)蔵
20	〃	佐藤博物館(豊田村)蔵
21	人力車許可証	若林勅滋(上田市)蔵
22	絵馬(重量物運搬)	育良神社(飯田市)蔵
23	木曾馬(剥製)・荷鞍	名古屋市市民休暇村管理事務所(王滝村)蔵
24	中馬装束 荷鞍	根羽村歴史民俗資料館蔵
25	〃 さんどがけ	〃
26	〃 くびかけ	〃
27	〃 はらかけ	〃
28	〃 だろよけ	〃
29	〃 おもがい	〃
30	〃 くつご	〃
31	馬宿看板なか屋	〃
32	貸馬看板	〃
33	馬 鈴	軽井沢町資料館蔵
34	〃	若林勅滋(上田市)蔵
35	〃 (鉄輪)	〃
36	絵馬(伊那谷の運輸)	立石寺(飯田市)蔵
37	〃 (江戸柿問屋)	〃

- 50 ラックレール（確氷峠）
 51 警 鐘
 52 判任官制服
 53 時刻表（明治31年2月・3月号）
 54 " （大正7年2月・3月号）
 55 汽車待合図灯（6個）
 56 大日本鉄道線路細見図
 57 時刻表（明治・大正・昭和4冊）
 58 鉄道旅行図・鉄道地図（6冊）
 59 鉄道唱歌（第4集）
 60 第一勸業銀行錦絵
 61 大日本里程明細全図

海上の運輸

- 62 黒船ポーハタン（1／50）
 63 感 臨 丸 （ " ）
 金刀比羅神社奉納模型和船
 64 栄寿丸（不明）
 65 住吉丸（嘉永5年）
 66 幸得丸（慶応4年）
 67 亀運丸（明治6年）
 68 猷額装和船（明治9年）
 69 絵馬（北前船）
 70 " （ " ）
 71 " （ " ）

河川の運輸

- 72 川 舟（模型）
 73 高瀬舟（ " ）
 73 荷物出入帳
 75 貸金受払帳
 76 水陸貨物運賃受払帳
 77 通船出荷帳
 78 肥料売買営業看板
 79 犀川渡舟絵ハガキ
 80 犀川通船絵画

長野の交通

- 81 100型車輪
 82 レール（コロラド社製）
 83 " （テンシー社製）
 84 レバー式転てつ機・標識

- "
 "
 交通博物館蔵
 "
 "
 若林勅滋（上田市）蔵
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 神奈川県立博物館蔵
 "
 金刀比羅神社（新潟市）蔵
 "
 "
 "
 "
 "
 荒神宮（上田市）蔵
 "
 "
 中里村公民館（新潟県）蔵
 群馬県立歴史博物館蔵
 牛越文雄（生坂村）蔵
 "
 "
 尾沢暁（信州新町）蔵
 "
 塩入清嗣（ " ）蔵
 明科町公民館資料室蔵
 長野電鉄株式会社蔵
 "
 "
 "
 "

85	おもり付転換器	長野電鉄株式会社蔵
86	タブレット式閉塞機	"
87	タブレット・タブレットキャリア	"
88	双 信 機	"
89	転てつ標識	"
90	パンタグラフ	"
91	制輪子木型	"
92	コンクリート製制輪子	"
93	ブレーキ弁	"
94	車止め機・標識	"
95	合 図 灯	"
96	ヘッドマーク	"
97	尾灯（貨物用）	"
98	室内灯カバー	"
99	方 向 板	"
101	社 員 章	"
102	助役制服一式	"
103	え り 章	"
104	笛	"
105	時 計	"
106	社 札	"
107	改 鋏	"
108	ダイヤグラム	"
109	路線案内図	"
110	各種切符類	"
111	ＯＳ車・ローレル賞状	"
112	車掌カバン・切符	川中島観光株式会社蔵
113	株券（創業時）	二本松貞（長野市）蔵
114	時 刻 表	川中島自動車株式会社蔵
115	社 旗	"
116	営業許可証	"
117	乗 車 券	"
118	自動車就業免許証	村田永助（長野市）蔵
119	自動車運転免許証	伊藤清雄（ " ）寄贈
120	善光寺白馬電鉄看板	善光寺白馬電鉄株式会社
121	" 株式会社設立趣意書	"
122	茂菅付近絵ハガキ	"

- (3) 趣旨 家の建築構造はその土地の自然環境と文化をよく示している。永い歴史の中で、人々は工夫し、風土に適合した民家をつくりあげてきた。また家の間取りや使い方、家の内外にまつられている神々といった問題を探ることは、その地域の文化的特性を浮き彫りにすることになる。

こうした視点より、民家のうち特に農家に焦点をあてて、地域調査を進め、「住まいとくらし」をわかりやすく展示し、わたしたちがこれまで歩んできた日々の生活を再認識することを主眼とする。

(4) 展示構成

- ①住まいを建てる
(地つき・上棟式・屋根葺)
- ②住まう
(間取り・住生活用具)
- ③神と仏をまつる
(家の中の神々・屋敷神)
- ④暮らす
(養蚕・紙すき・麻)

(5) 資料点数 200点

(6) 催物

講演 「屋敷神をめぐるって」

佐々木勝氏(千葉工商高校教諭)

3月21日

映画 「住まいのむかしと今」

白黒11分

東映株式会社

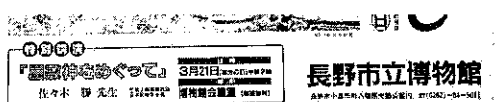
ビデオ 「NHKライブラリー選集—

屋根—」 白黒30分

NHKサービスセンター

音声 「芋井の亀の子つき」

芋井郷土資料室

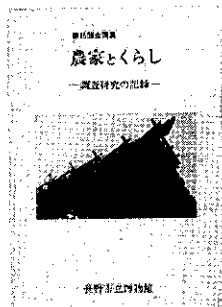


第15回企画展 農家とくらし

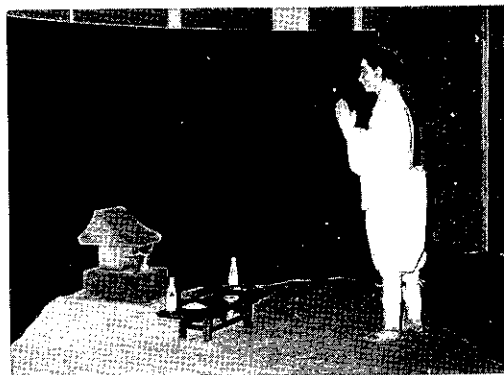
展 1987年2月15日—3月22日
長野市立博物館特別展示室



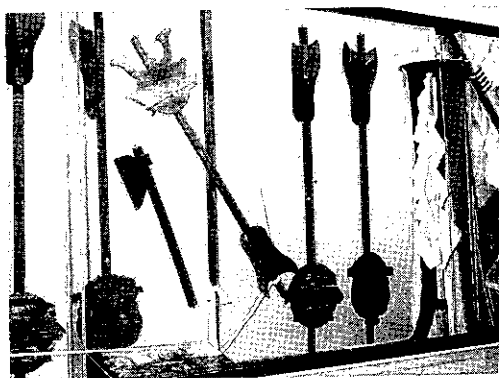
長野市立博物館
長野市中央1-1-1(旧市立中央公民館)
TEL:026-222-1111



ポスター・パンフレット・図録



屋敷神をまつる



建築儀礼—弓矢など—

(7) 展示資料目録

No.	名 称	点数	所 蔵 者
＜昔の農家＞			
1	ワラウマ	1	当館蔵
2	オケ	4	〃
3	タマリトリ	1	〃
4	スゲガサ	1	〃
5	ミノ	1	〃
6	ワラジ	3	〃
7	ミ	1	〃
8	ヨコチョウギネ	1	〃
9	ツチイレ	1	〃
10	フミスギ	1	〃
11	ジョレン	1	〃
12	ビッチョウ (3本鋏)	1	〃
13	フログワ	1	〃
14	カマド	1	〃
15	ナベ	1	〃
16	シャモジ	1	〃
17	フロオケ	1	渡辺江一郎氏 (長野市) 蔵
18	ハンギリ	1	当館蔵
19	カメ (大)	1	〃
20	カメ (小)	1	〃
21	ナガシ	1	〃
22	テオケ	1	〃
23	イシウマ	1	〃
24	カマ	1	〃
25	スイノウ	1	〃
26	トウジカゴ	1	〃
27	コネバチ	1	〃
28	セイロ	1	〃
29	ベニバチ	1	〃
30	コメアゲザル	1	〃
31	フルイ	1	〃
32	スリバチ	1	〃
33	モロブタ	2	〃
34	シオガメ	1	〃
35	ショウユドックリ	1	〃
36	サカドックリ	1	〃
37	サカダル	1	〃
38	オカモチ	1	〃
39	ハコゼン	3	〃
40	コクバコ	1	〃
41	コナブルイ	1	〃
42	イロリバチ	1	〃
43	カギツケ	1	〃
44	ワタシ	1	〃

60	チャダンス	1	"
61	神棚	1	"
62	ザグリ	1	"
63	コタツ	1	"
64	コタツガケ	1	"
65	マルボン	1	"
66	仏壇	1	"
67	イトグルマ	1	"
68	祝儀膳（膳・椀）	12	"
69	ジキリョウ	1	"
70	ユトウ	1	"
71	オオビラ	1	"
72	メシビツ	2	"
73	大皿	1	"
74	フミダイ	1	"
75	掛軸	2	山口純一氏（長野市）蔵
76	きじ はく製	2	"
77	屋敷神祠	1	徳成孝一氏（長野市）蔵
78	屋敷神供物	1	当館蔵
79	南原村屋敷割絵図	1	岡沢俊雄氏（長野市）蔵文書より作成
〈板へぎ道具〉		1	
80	テノコ	1	中川村歴史民俗資料館蔵
81	ナタ	1	"
82	クサビ	1	"
83	キツチ	1	"
84	チョウギ	1	"
85	イタへギボウチョウ	3	"
86	ワリダイ	1	"
87	セン	1	"
88	カナヅチ	1	"
89	スミツボ	1	"
90	道具箱	1	"
91	ハントチ製品	1 東	"
92	ハントチ未製品	4	宮下正親氏（中川村）蔵
〈茅葺き道具〉			
93	テッコウ	1	富田義照氏（戸隠村）寄贈
94	ハッピ	1	"
95	ハリ	1	"
96	キネ	1	"
97	オオバサミ	1	"
98	コバサミ	1	"
99	ツカミ	1	"
100	聖徳太子像掛軸	1	"
101	亀の子石	1	芋井郷土資料室
102	「地つき」絵馬	1	育良神社（飯田市）蔵

<上棟式儀礼用具>		
103	弓矢	3 倉島藤太氏（長野市）蔵
104	〃	1 宮沢卯蔵氏（長野市）蔵
105	まさかり	2 〃
106	扇車	1 〃
107	吹き流し	1 〃
108	神盞幣	1 対 〃
109	テイタ	4 〃
110	〃	1 上原喜重氏（松本市）蔵
111	普請見舞受納帳	1 喬木村歴史民俗資料館蔵
112	棟札とワラゾウリ	1 組 〃
113	棟札	2 麻場長男氏（長野市）蔵
114	棟に立てる剣	3 当館蔵
115	家相図	1 坂口賢一氏（長野市）蔵
116	〃	1 大原利男氏（喬木村）蔵
117	〃	1 安川幸雄氏（長野市）蔵
118	〃	1 田中暢氏（長野市）蔵
119	十二支方向磁石	1 〃
<麻用具>		
120	オキリボウチョウ	3 当館蔵
121	オカキ	1 〃
122	オカキイタ	1 〃
123	オボケ	2 〃
124	麻糸撚り機（手まわし）	1 〃
125	〃（足踏）	1 〃
126	麻糸撚り合わせ機	1 〃
127	麻糸未製品	〃
128	畳糸製品	2 〃
<紙すき用具>		
129	カミツケイタ	1 宮下正次氏（戸隠村）寄贈
130	カミツケボウ	1 〃
131	クゴ	1 束 〃
132	ハケ	1 〃
133	スキゲタ（大）	1 〃
134	スキゲタ（小）	2 〃
135	山中紙	3 〃
136	マンガ	1 〃
137	ス	3 〃
138	ザル	1 〃
139	キネ	2 〃
140	コウゾの皮	1 束 〃
141	スキブネ	1 山口治郎氏（戸隠村）寄贈
142	たたき石	1 当館蔵
<養蚕用具>		
143	繭かご	1 当館蔵
144	繭出荷用かご	1 〃
145	毛羽取り機	1 〃
146	種紙	13 〃

展示写真資料一覧

No.	内 容
1	中門造りの農家（飯山市富倉中谷）
2	曲屋造りの農家（栄村大久保）
3	寄棟造りの集落（小谷村真木）；昭和26年
4	本棟造りの民家（喬木村）；明治44年
5	中引をはさむチョウナ削りの梁（飯山市富倉中谷）
6	雪にうもれる家（飯山市柄山）
7	始まった稲刈り（武石村）
8	みそ玉をつるす（三郷村）
9	板を葺く（穂高町曾根原家）
10	茅を葺く（塩尻市小松家）
11	茅の葺きあがり；富田義照氏蔵3点
12	上棟式；昭和56年頃
13	上棟式；昭和16年頃
14	麻糸撚り
15	麻糸撚り合わせ（畳糸）
16	麻うみ
17	紙つけ板につける
18	スキブネですく
19	コウゾの皮をかく
20	蒭かき（収蒭）（武石村）
21	棟に立てられた剣と御幣（中条村古屋敷）
22	ウチグラのある農家（茅野市安国寺中之沢）
23	雪国特有の梁（栄村大久保）
24	石据えの柱が残る農家（中条村新井）
25	大軒造り（原村中新田）
26	ヤシキガミサン（若穂綿内町）
27	オチンジュサン（篠ノ井布施五明）
28	オイナリサン（〃）
29	チンジュサマ（更北下水鉋）
30	オチンジュサン（松代町豊栄関谷）
31	ウジガミサン（信更町水ノ田）
32	ニワノカミサン（古牧荒屋）
33	ヤシキガミサン（浅川西平）
34	オチンジュサマ（松代町田町）
35	オチンジュサン（松代町東条）
36	ヤシキガミサン（中御所町）

2 天体学習室（プラネタリウム）

1) 概要及び運営方針

当館の天体学習施設としてのプラネタリウムは、ドームの直径が12m、座席数が120の演出しやすい一方座席となっている。

平日は学校教育の一環として理科教育センターが学習投影を行い、土曜・日曜・祝日に当館が一般向けに投影している。なお、一般投影はプログラムを組んで行うオート投影で、録音と原画製作以外は自主制作をしている。

天体学習室は、星空の世界への水先案内人であり、多くの人たちが宇宙への関心を持ち、その理解を深めるための手助けをする場所と考えている。したがって、投影の内容も、小学校高学年以上に理解できるように、また誰もが楽しく学習できるように配慮している。

投影番組は季節に合わせて3ヶ月ごとに変えている。番組制作に当たり、外部委託は次のとおりである。

録音テープ製作…(株)長野トップ、原画製作…永野裕子

2) 投影内容

(1)夏の番組 「火星大接近」

①投影期間 昭和61年6月～8月

②内容

よく晴れた晩、ある天文台では大接近中の水星を観測していた。すると、火星表面に異様な現象を目撃した。それは、何かが火星表面で爆発しているかのような白色光であった。やがて、地球では明るくすじを引くいくつもの流れ星が見られた。実はその流れ星は、地球侵略を企てた火星人の宇宙船だったのだ。

.....H・G・ウェルズの「宇宙戦争」より.....

時は現代、場所は某博物館に変わり、そこで信濃大学教授が天文の講義をしている。土星が黄色く、そして火星が赤く輝く夏の星空

と、かんむり座にまつわる伝説の話をし、続いて今、大接近をしている火星の話に移る。「宇宙戦争」の小説が出た当時は本当に火星人がいると信じていた人も多かったという。さらに、イタリアの天文学者スキアパレリは火星を観測していて、火星の表面に細長い線のようなものが縦横に走っているのを見たといい、それをイタリア語で「カナリ」(すじ)と名付けた。ところが次第に「カナリ」が英語の「カナル」(運河)になったために「火星人がいる、ということに

プラネタリウム

火星大接近

1986年夏 4/20



火星大接近して観測中

長野県立科学館

パンフレット



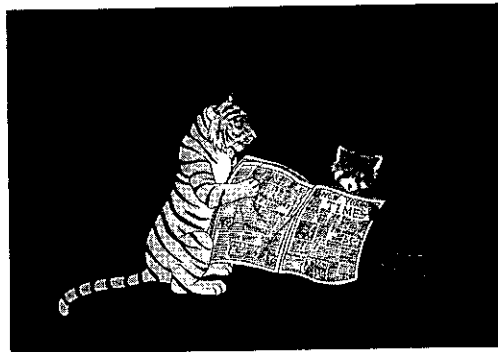
サーパンダの美美ちゃんと、とらのがん太、そしてふくろうのおしさんである。今晩は満月、そして中秋の名月である。がん太と美美は大きくまんまるい名月を見ながら、ふくろうのおじさんからいろいろ教えてもらう。例えば、地平線に近い月は大きくて、上に昇ってきた月は小さいのはどうしてかということや、昔から伝わる名月の慣習、春アフリカのホットントットに伝わる月の伝説、そして秋の星座などの話であった。

やがてがん太は1つの新聞を持って来た。そこには「ついに月人発見」という記事が載っていた。実際にアメリカであったでっち上げの記事である。既に人間が月に降り立ち、月の真の世界を知っている世の中だが、がん太と美美は月をはじめとして宇宙への純粋な夢を持ち続けている。そう。彼の心の中では、今も月に兔がいて、おもちをついているのである。

③入場者数 3,760人



パンフレット



トラのがん太とレッサーパンダの美々ちゃんは…

(3)冬の番組 「宇宙版 アルゴ船 いざ出航！」

①投影期間 昭和61年12月～62年2月

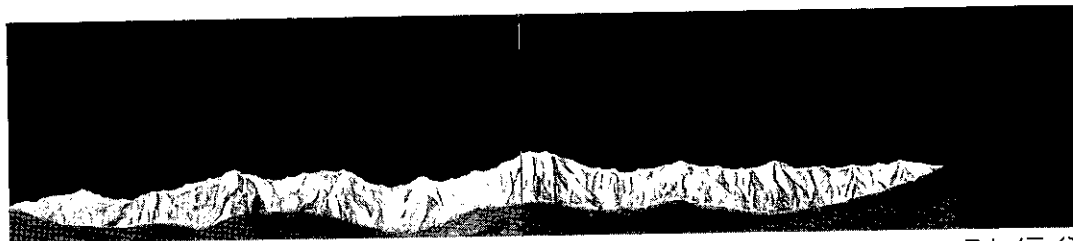
②内容

アルゴ船遠征は、ギリシャ神話にある有名な物語である。それはギリシャのテッサリアはイオルコスという町の王子イアソンがギリシャ中の勇士を集めて遠くコルキスへ行き、金羊の皮衣を取ってくるという大冒険である。

プラネタリウムでは、この物語を宇宙版に書き変えて投影した。惑星イオルコスの王子イアソンは、イオルコスの住民を悩ませているハエを取る道具をもって来るためにはるか彼方の惑星地球へ出発した。イアソンにお供するのは腕利きの双子の兄弟、カストルとポ



パンフレット



スカイライン

ルックスである。彼らは途中女性だけの星へ寄ったり、ボクシングの試合をして負けたら奴隷になるか殺されるかのどちらかというひどい星へ降りたりと、さまざまな冒険をしてようやく目的地地球へ到着した。そこでは、イアソンと知的水準に近いねずみという生物と仲良しになり、その協力で見事にはえたたきを手に入れることができた。彼らは喜び勇んでイオルコスに帰ったが、そこで待っていたのは彼らの知っているイオルコスではなかった。彼らは光速に近いスピードで旅をしたために相対論が示すようにイオルコスでは何万年も過ぎていたのである。

③入場者数 1,583人

(4)春の番組 「星空のマリオ」

①投影期間 昭和62年3月～5月

②内容

マリオとルイジの兄弟は、さらわれたパーチ姫を救い出すために春の星空へと出発した。しばらく行くと1つの砦へ到着する。そこには「きのこがみ」という変な人？がいて「パーチ姫を助けたかったらこれから出すクイズに正解していかなければならない」と言う。マリオとルイジはそれぞれ別々に春の星座クイズに挑戦していく。ルイジは全問正解でスムーズに次々と進んで行くが、マリオはなかなか正解できずにその都度罰ゲームをさせられる。その罰ゲームとは、鼻をつまんで童謡を歌うことであった。やきもきして待っているルイジの所へようやくマリオは到着して、最後の砦を守っている化け物を退治した。2人は無事パーチ姫を救い出すことができたのだ。

ところがこれは、マリオとルイジの進級試験だった。ルイジはパスしたが、マリオは見事に落第してしまった。そのために、マリオは再びパーチ姫を助けに行かなければならなかった。

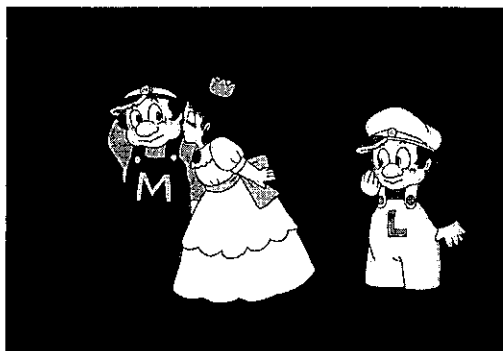
③入場者数 5,128人



見事にはえ取り道具を手に入れることができた
彼らは…



パンフレット



マリオとルイジの兄弟は、さらわれたパーチ姫を助けるために…

調査結果 前年に引き続き、現在の水田下に埋没している平安時代の水田遺構の調査を実施した。検出された埋没水田は、仁和4年(888)の大洪水によると思われる千曲川氾濫砂に覆われており、畦畔部分は20か所を数える。畦畔の頂部はその後の水田復興による耕作で削平されている場合が多く、西側の地域では、千曲川支流の聖川の氾濫による砂礫層の堆積も数段にわたって観察されている。



トレンチによる調査

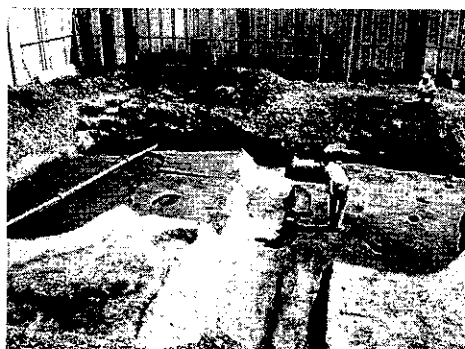
今回の調査により、圃場整備計画のうちの農免道～信越線間の地域に関してほぼ調査が完了した。東西1.1kmにわたる広大な地域における平安時代埋没水田遺構の状況は、今後の調査成果の整理により把握されるものと期待される。

(2) 芹田小学校遺跡(稲葉)

期 間 昭和61年7月21日～7月30日

調査原因 校舎増改築事業に伴う緊急発掘調査

調査結果 裾花川沖積地域に当る調査地周辺では、従来埋蔵文化財の存在が希薄であったが、調査の結果地表下1mに平安時代の住居跡を2軒検出するに至り、平安時代全般にわたった集落遺跡の存在を確認することができた。



平安時代住居の調査

この芹田地域は、律令時代信濃国水内8郷のうちの「芹田郷」に比定されているものの、それを裏付ける考古学的調査はほとんど着手されることがなかった。今回の調査は、その実像を解明するための第一歩となり、限られた範囲ではあったが、古代芹田の一面をのぞき見ることができた。

(3) 平久保沖条里・第2次(篠ノ井塩崎)

期 間 昭和61年8月1・2日、11月13・14日

調査原因 団体営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査

調査結果 平久保沖圃場整備にともない開始された埋蔵文化財保護・発掘調査も、第2年次を迎えた。検出された遺構は、昨年同様に条里的地割に基づくと考えられる平安時代埋没水田であり、5か所において畦畔部分を確認した。

隣接する石川条里に接続する形で、水田遺構が埋没するものと思われ、調査地南側の千曲川自然堤防寄りにおいては、良好な状態で遺構が存在していることが確認された。継続される今後の調査により、石川条里も含めた平安時代水田経営の在り方が解明されるものと期待される。

(4) 南川向遺跡(北長池・北尾張部)

期 間 昭和61年8月4日～8月14日

調査原因 宅地開発に伴う緊急発掘調査

調査結果 本遺跡の所在する千曲川左岸の微高地上には、「小島・柳原遺跡群」として包括される多くの遺跡が確認されている。過去の調査により、弥生・古墳時代の集落遺跡の存在が明らかとなっていたが、今回の調査においては平安時代の住居跡6軒等が検出され、更に新しい段階の集落遺跡群としての知見を加えることができた。

注目される遺物として、長野市内では3例目の緑釉陶器の出土があげられ、水内郡尾張郷との関連において興味深い課題が提示されることとなった。



平安時代住居の発掘

(5) 地附山・上池ノ平古墳群(上松)

期 間 昭和61年8月20日～9月26日

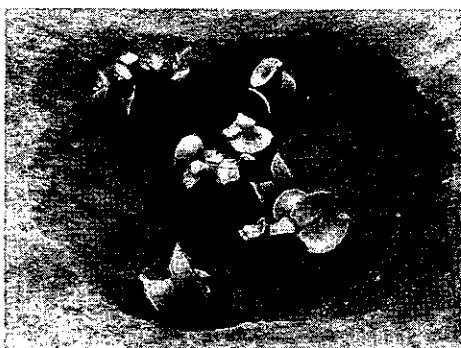
調査原因 防災工事に伴う緊急発掘調査

調査結果 昭和30年に発掘調査が実施されている上池ノ平古墳が、地附山地滑り防災工事により破壊されることにともない、再調査を実施したものである。調査着手により、工事範囲内で新たに4基の円墳の存在も明かとなり、計5基を発掘調査する結果となった。古墳群の構造は、合掌形石室を含む石棺形式の小石室を埋葬施設とした円墳であり、内2基からは墳頂及び墳裾に墓前祭を思わす土器類の埋納を確認した。ほとんどが埋葬施設に盗掘を受けてはいたが、5号墳合掌形石室内より鉄剣・鉄鏃・馬具の副葬品が検出されている。

調査地の地附山は山頂の前方後円(方)墳を中心として未調査の古墳が他にもいくつか存在しており、今回調査された古墳を含めて、地附山古墳群として把握されることができよう。その築造年代については、5世紀後半より6世紀前半にわたることが予想され、善光寺平北縁における該期の古墳群として大いに注目されるところである。また、善光寺平に分布の中心をおくとされる特異な石室形式合掌形石室の盛行年代については、従来不明な部分が多かったものの、今回の調査所見から確実な年代観が導かれ



1号墳主体部



2号墳裾の祭祀土器の出土

調査月日 昭和61年12月17日

(C) 手塚一氏宅(飯山市富倉中谷)

調査月日 昭和61年12月16日

(D) 坂口樹太郎氏宅(長野市松代町東条般若寺)

調査月日 昭和62年1月7日

(E) 安川幸男氏旧宅(長野市小島田町紙屋)

調査月日 昭和61年12月14日

(F) 麻場長男氏旧宅(長野市芋井樋)

調査月日 昭和61年12月12日

(G) 石坂一迪氏宅(長野市七二会戌)

調査月日 昭和61年10月22日

(H) 渡辺幸二氏宅(長野市篠ノ井小松原段の原)

調査月日 昭和61年8月29・30日

(I) 宮下正次氏宅(上水内郡戸隠村栃原笹原)

調査月日 昭和62年2月1日

(J) 北沢英太郎氏宅(上水内郡鬼無里村東京)

調査月日 昭和61年12月19日

(K) 新井成年氏宅(上水内郡中条村御山里伊折新井)

調査月日 昭和61年12月18日

(L) 宮坂弥門氏宅(小県郡長門町大門岩井)

調査月日 昭和62年1月16日



マガリウチ(阿部義彦氏宅・栄村大久保)



マヤと土間(新井成年氏宅・中条村新井)



養蚕農家(宮坂弥門氏宅・長門町大門岩井)

(2) 信仰習俗の調査（屋敷神）

（A）アンケート調査

屋敷神信仰について、昭和61年12月に長野市内の区長宅（425行政）へアンケート調査を実施した。その結果、合計167通（うち有効回答数117通）の回答をお寄せいただいた。

（B）個別調査

①信更町氷ノ田原市場

調査月日 昭和62年1月18日

②古牧荒屋

調査月日 昭和62年1月8日

③浅川西平

調査月日 昭和62年1月8日

④松代町東条般若寺

調査月日 昭和62年1月7日

⑤松代町松代田町

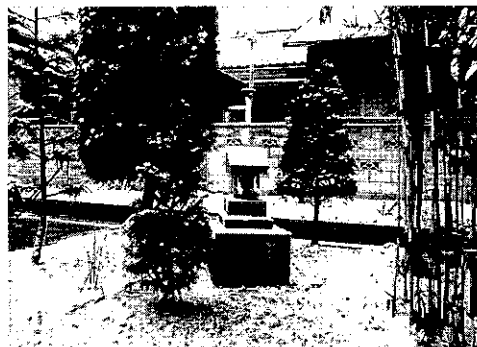
調査月日 昭和62年1月7日・9日

⑥篠ノ井布施五明

調査月日 昭和62年1月10日・2月14日



ウジガミサン（信更町氷ノ田原市場）



ニワノカミサン（古牧荒屋）

(3) 建築習俗の調査（屋根葺き）

（A）板葺き屋根

話者 宮下正親氏（73才・上伊那郡中川村
飯沼）

調査月日 昭和62年1月23日

（B）茅葺き屋根

話者 富田義照氏67才・上水内郡戸隠村
尾上）

調査月日 昭和62年1月27日



屋根を葺く（稲里町下氷鉤）

以上(1)～(3)の調査内容については「第15回企画展 農家とくらしー調査研究の記録一」を参

上水内郡戸隠村川下部落西方からは、豊富な貝化石が産出することで知られているが、今回、裾花川の堤防工事にともなって(×印)、より多数の化石包含岩石を採集することができた。



×印が採集地点

ここから産出する化石は、富沢(1958)の下楡木化石動物群に相当し、シナノホタテ、ンガラミサルボウなどといった長野県を代表する貝類化石を含んでいる。採集した化石包含岩石は、来年度以降の化石教室のとき、化石のクリーニングの学習に利用する予定である。

4) 歴史部門

企画展「農家とくらし」の展示資料収集の際に、川中島町南原の岡沢益雄氏宅に宿場関係古文書が保存されていることを発見した。南原は北国街道の矢代宿と丹波島宿の間宿であり、岡沢家には街道筋の民家の様子を具体的に知ることのできる貴重な史料が残されていた。以下、岡沢文書の概要について記す。岡沢文書は企画展に展示後、寄託資料としていただいた。

〈岡沢文書について〉

長野市川中島町南原471番地の岡沢益雄氏宅に所蔵されている、文久3年(1863)癸亥10月の年号のある「当村御高所持人別帳」と共に、更級郡原村南原宿の街道筋の軒別絵図が発見された。この絵図は、雨に濡れたのか上下が若干欠損しているために、街道から奥へ入った小路に面する民家が一部不明のところもあるが、軒別に書かれている各戸の大きさは、ほぼ実測に基いているようである。

その根拠となる各戸の間取図が別冊(3冊)として一戸一枚に作図されたものが残っている。これはいわゆる「水帳絵図」として作成されたものではないと思われるが、それに比するに足るものであろう。

軒別街道図は、御本陣を中心として書かれ戸主の名を別記してある。名のみのものが殆んどであるが、苗字を併せ記してあるものは東側29、西側37、計66軒のうち5軒ある。文久3年といえは、江戸末期であり苗字を許されるものもふえてきた頃であるから、必ずしも庄屋をつとめた家のみではないようだ。

間取図には、図面の右肩に「御本陣より〇間^{けん}」と記されているが、この距離は、本陣の門口のどこから計ったものがはっきりしないが、おそらく本陣の門の中心から各家の入口の中心までではないかと思われる。

この宿場は、国道18号線丹波島橋南から西へ入る一般県道丹波島篠ノ井線の原地籍で旧北国街道に位置し、この道筋は現在も当時とあまり変っていない。現在の町並みに残る家名も子孫と判断できるものが殆んどであるのは土地開発がなされていないためと思われて興味深い。

街道ぞいの家、特に宿場は間口より奥行きが長いのが一般的であり、この南原も間口の長さに対して奥行きが長い。間取図のある69軒（3戸は街道から入った家）を間口別に大別すると、3間以上4間まで26軒、4.1間以上5間まで21軒、5.1間以上7間まで15軒、7.1間以上7軒で、最も広いのに10間間口で1軒あった。従って5間間口以下が47軒と70%を占めている。

「見世」と表示されている空間を有する家は、23軒あり、酒造業、油製造業を営む家が各1軒、そのほかは農業のかたわら荒物、雑貨、クスリなどを商っていたと思われる家が14軒、年貢を納めるほどの田畑を有していないで見世を持っているのは7軒もあった。いずれにしても見世（商家で主屋の道路に面した家、見世棚などを置いてある。）を持つ家が³/₅を占めているのは、北国街道筋も経済活動が活発になってきたきざしとも見られ、明治への胎動が感じられる。

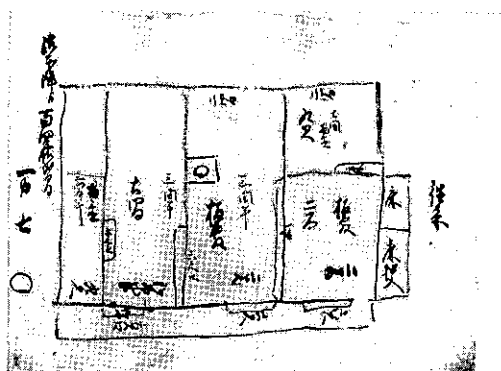
間取りは、土間、物置などを含めて最も少ない3間から最も多い11間までまちまちであり、土間と板の間だけの家も僅かに見られるが、畳の部屋を持つ家が殆んどである。二階部屋を有する家も2軒あった。

建坪は、15坪が最小で64.2坪が最大であり50坪以上は8軒に過ぎない。91坪余の蓮香寺は別格である。

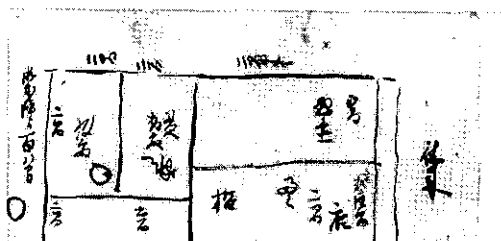
なお、「当村御高所持人別帳」は各戸の石高が○合○夕まで詳細に記載されているが、全く石高の無い者は13人となっている。



当村御高所持人別帳



間取図



会場 会議室

演題 「古代の鏡一霊魂を籠める器物―」

講師 桐原健（県史編纂委員）

聴講者 30人

内容 本年報のⅥ章に講演録を掲載したので

参照されたい。



鏡の文化講演会（桐原健氏）

(2) 企画展「農家とくらし」講演会

日時 昭和62年3月21日午後2時～3時30分

会場 会議室

演題 「屋敷神をめぐる」

講師 佐々木勝（千葉工商高校教諭）

聴講者 70人

内容 本年報のⅥ章に講演録を掲載したので

参照されたい。



農家とくらし講演会（佐々木勝氏）

2) 博物館教室

(1) 春の天体教室

日時 昭和61年5月10日19時～21時30分

会場 天体学習室

視聴覚機器材 プラネタリウム・16mm映画「星の動きを調べる」・スライド

受講者 52人

内容 曇天となり、望遠鏡を使って星を見ることができなかったために、プラネタリウム内での学習となった。

プラネタリウム内では、春の星座について説明し、北斗七星や北極星のようにわかりやすい星は、受講者にさがしてもらいながら学習した。さらに、ハレー彗星の経路や位置を解説した。

(2) 夏の天体教室

日時 昭和61年8月27日18時30分～21時

会場 天体学習室

視聴覚機器材 プラネタリウム・16mm映画「太陽と月」・スライド

受講者 58人

内容 雷雨となり、望遠鏡を使って星を見ることができなかったために、プラネタリウム内での学習となった。

プラネタリウム内では、夏見える星、星座等を説明し、さらに、スライドで金星、土星、火星、木星を解説した。

(3) 秋の天体教室

日時 昭和61年11月3日17時～19時

会場 天体学習室・天体観測ドーム

視聴覚機器材 プラネタリウム

受講者 73人

内容 天気恵まれたため、プラネタリウム内での学習は、今夜見える星を説明しただけである。

天体ドームでは、15cm屈折望遠鏡と20cm反射望遠鏡を使って木星を観察した。この屋上に出ての実際の星空学習は、プラネタリウム内とは違って多大な学習効果があったと思われる。

(4) 天文初歩教室

日時 昭和61年7月15日18時30分～20時30分

会場 博物館前庭

資料 望遠鏡を押入・物置にしまわない天文教室資料18頁

受講者 63人

内容 望遠鏡の基礎知識からはじめて、望遠鏡の取扱い、ファインダーの合わせ方を指導した。曇天であったために実際に星や月の観望ができなかったが、実際に望遠鏡を持参した人達のほとんどが取り扱いを知らなかったため、望遠鏡を使う良いきっかけになったと思われる。

さらに、スケッチ用紙、月面図を配布し、自宅でスケッチしてもらい博物館に送ってもらうよう依頼した。

(5) 第6回プラネタリウムコンサート

日時 昭和61年6月21日19時～20時30分

特集 クラシック・メシエ天体(その2)

対象 高校生以上

入場料 150円

入場者数 98人

(以下、対象・入場料は同様)

第6回コンサート曲目

1	曲 2	名	演奏者
1	ヘンデル／水上の音楽	Suite en fa majeur	ジャン＝フランソワ・バイヤール指揮 バイヤール室内管弦楽団
2	シューベルト／ピアノ五重奏曲イ長調D667〈ます〉	Thema Andantino-Variationi I-V-Allegretto	エミール・ギレリス(ピアノ) アマデウス弦楽四重奏団
3	アルハンブラ宮殿の思い出		ジョン・ウィリアムス(ギター) ジョン・ウィリアムス指揮 ストリング・オーケストラ
4	カヴァティナ“ディアハンターのテーマ”		//
5	モーツァルト／弦楽セレナード ト長調 KV 525 「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」	Allegro	ジャン＝フランソワ・バイヤール指揮 バイヤール室内管弦楽団
6	バッハ／G線上のアリア		イヴリー・ギトリス (ヴァイオリン)
7	フォーレ／シチリアーノ		クリスチャン・ラルデ(フルート) アリー＝クレール・ジャノ(ハープ)
8	ビゼー／「アルルの女」メヌエット		//
9	ドヴォルザーク／弦楽四重奏曲 第6番「アメリカ」へ長調 作品96 第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo		ジュリアード弦楽四重奏団
10	スメタナ／弦楽四重奏曲 第1番「わが生涯より」ホ短調 第4楽章 ヴィヴァーチェ		//

4	ジ・エンターテイナー／ラグタイム・トゥー・ステップ／カティア&マリエル・ラベック (ピアノ)
5	バーンスタイン／シンフォニック・ダンス「ウエスト・サイド物語」
6	エリック・サティ／ジュ・テ・ヴー／フェビアン・レザ・パネ (ピアノ)
7	シャカタク／ディス・ボーイ・イズ・マイン
8	USA for AFRICA ウィ・アー・ザ・ワールド
9	JET STREAM コンドルは飛んで行く
10	JET STREAM 夢のカリフォルニア
11	井上陽水／いっそセレナーデ

(7) 第8回プラネタリウムコンサート

日時 昭和61年11月15日18時30分～20時

特集 ニュー・ミュージック・宇宙

入場者数 103人

第8回コンサート曲目

No.	曲	名
1	シベリウス・交響曲第2番ニ長調作品43 第1楽章：アレグレット	
2	杉山清貴 Stay The Night Forever	
3	松任谷由美 Tropic Of Capricorn	
4	〃 ジャコビニすい星の日	
5	〃 星空の誘惑	
6	井上陽水 星空へHappy Game	
7	ゴダイゴ 銀河鉄道999	
8	谷村新司 昂～すばる～	
9	〃 陽はまた昇る	
10	〃 天狼	
11	ウェーバー クラリネット協奏曲第1番ヘ短調作品73 第3楽章 ロンド アレグレット	

(8) 第9回プラネタリウムコンサート

日時 昭和62年2月22日17時30分～20時30分(2回実施)

特集 クラシック・冬の星座

ナレーター 木村雅英

入場者数 1回目 95人、2回目 71人

第9回コンサート曲目

No.	曲	名
1	フランツ・リスト 交響曲《前奏曲》	ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
2	レノン・マッカートニー フール・オン・ザ・ヒル	ジョン・ウィリアムス(ギター) ジョン・ウィリアムス指揮 ストリング・オーケストラ
3	ベドルジヒ・スメタナ 交響曲《モルダウ》	ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
4	スコット・ジョプリン ストレートニューアス・ライフ	カティア&マリエル・ラベック (ピアノ)

5	ワーグナー	ジークフリートの葬送行進曲	サー・ゲオルグ・ショルティ指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
6	エリック・サティ	小さいピエロの踊り	フェビアン・レザ・パネ（ピアノ）
7	ヘンデル	水上の音楽 SUITE en sol majeur	ジャン・フランソワ・バイヤール指揮 バイヤール室内管弦楽団
8	ジョージ・ウィンストン	あこがれ／愛	

(9) 第10回プラネタリウムコンサート

日時 昭和61年3月29日18時30分～20時

特集 映画音楽・春の星座

入場者数 85人

第10回コンサート曲目

No.	曲	名
1	タイトルズ	「炎のランナー」より ヴァンゲリス
2	ビック・ウェイブ	「ビック・ウェイブ」より 山下 達 郎
3	アマポーラ	「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」より ロイヤル・シンフォニック オーケストラ
4	美しき獲物たち	「007 美しき獲物たち」より ロイヤル・シンフォニック・ オーケストラ
5	ひまわり	「ひまわり」より N H K交響楽団
6	エデンの東	「エデンの東」より アンサンブル・アチと スクリーンランド・オーケストラ
7	バリの空の下	「バリの空の下セーヌは流れる」より フランク・ブウルセル・グランド オーケストラ
8	追 憶	「追 憶」より N H K交響楽団
9	アクセル F	「ピバリー・ヒルズ・コップ」より ロイヤル・シンフォニック オーケストラ
10	サウンド・オブ・サイレンス「卒業 業」より	サイモンとガーファンクル
11	セイ・ユー・セイ・ミー	「ホワイト・ナイツ」より ライオネル・リッチー
12	愛と青春の旅立ち	「愛と青春の旅立ち」より ジョー・コッカー& ジェニファー・ウォーンズ
13	愛さずにはいられない	「エルビス・オン・ステージ」より コリー・ハート
14	エンドレス・ラブ	「エンドレス・ラブ」より ダイアナ・ロス
15	タラのテーマ	「風と共に去りぬ」より N H K交響楽団

(10) 春の地質教室

日時 昭和61年8月3日 9時～15時

会場 茶臼山自然史館教室・茶臼山

受講者 24人（市内在住小学校5年生以上）

内容 午前中、教室において化石採集等についての講義を聞いた後、茶臼山に向い、地層の観察と植物化石の採集を行った。昼食後、採集してきた化石をタガネとハンマーを使ってクリーニングし、化石の分類・鑑定等についても学習した。

尚、この教室は7月13日実施予定のものを、雨天順延により8月3日に実施した。

(11) 秋の地質教室

日時 昭和61年10月12日 9時～16時30分

会場 信市町屋川漆桶

材料費 600円

持ち物 はさみ・筆記具・昼食

縄のなえる成人と限定して募集したため、高年齢層の方々が多かった。ごぼうじめ、しゃくしじめ・輪じめ・横じめ・大黒じめの5種類を作り、持ち帰った。

3) 刊行物

名 称	月 日	規 格	備 考
博物館だより 第6号	5月1日	B4 両面刷二ツ折	新収蔵資料展特集Ⅰ
火星大接近	6月7日	A4 二ツ折	プラネタリウムパンフレット No20
鏡の文化―手鏡から望遠鏡まで―	7月20日	B5・52頁	企画展図録
〃	〃	A4 二ツ折	パンフレット
茶白山の名月	9月6日	A4 二ツ折	プラネタリウムパンフレット No21
のりもの今昔	10月5日	B5・47頁	企画展図録
〃	〃	A5・30頁	パンフレット
年報―昭和60年度 Vol.4	10月30日	B5・137頁	博物館活動報告
宇宙版 アルゴ―船 いざ出航	12月6日	A4 二ツ折	プラネタリウムパンフレット No22
農家とくらし―調査研究の記録―	2月15日	B5・78頁	企画展図録
〃	〃	A4 二ツ折	パンフレット
星空のマリオ	3月7日	A4 二ツ折	プラネタリウムパンフレット No23

4) 博物館実習

実習生 村松雄人（静岡大学）昭和61年7月22～7月30日（8日間）
岩藤英司（東京学芸大学）昭和61年7月22日～8月2日（11日間）
小川有紀子（武蔵大学）昭和61年7月22日～7月30日（8日間）

実習日程概要

月/日	実 習 事 項	実 習 内 容
7/22	実習にあたって	実習心得（館長）・博物館施設管理と庶務（佐野） 地域博物館の役割（副館長）
7/23	常設展示	常設展示の構成（矢口）・企画展示計画（矢口） 展示案内業務（藪崎）・受付業務（水品）
7/24	調査研究・収蔵 整理の実習	民俗文化財の調査（安室）・民俗文化財の整理（山口） 博物館と保存科学（山口）
7/25		常設展示と郷土史（和田）・歴史資料の取扱いと実習（藤森） プラネタリウム実習（大蔵）
7/26		受付案内実習（水品・藪崎）
7/27		プラネタリウム投影及び受付実習（大蔵）
7/29		茶白山自然史館の展示（塩入） 自然資料の収集と整理（唐沢）
7/30		埋蔵文化財発掘調査実習（青木） 市内他施設見学（副館長）
7/31		文献資料の整理（大蔵）
8/1	整理の実習	〃
8/2		〃

III 博物館収蔵資料

1 購入資料

1) 図 書

国 宝 1	絵 画 I	毎日新聞社	重要文化財 24	工芸品 I	毎日新聞社
" 2	" II	"	" 25	工芸品 II	"
" 3	" III	"	" 26	" III	"
" 4	彫 刻 I	"	" 27	" IV	"
" 5	" II	"	" 28	考 古 I	"
" 6	工芸品 I	"	" 29	" II	"
" 7	" II	"	" 30	補 遺	"
" 8	" III	"	" 別 卷 I	像内納入品	"
" 9	書 跡 I	"	" " II		"
" 10	" II	"	埴輪の変遷—地域性と普遍性—		北武蔵古代文化研究会
" 11	" III	"	朝鮮考古資料集成 補 卷 1		出版科学総合研究所
" 12	考 古 I	"	" " 2		"
" 13	建造物 I	"	" " 3		"
" 14	" II	"	" " 4		"
" 15	" III	"	" " 5		"
国 宝 便 覧		"	" " 6		"
重要文化財 1	彫 刻 I	"	" 6・7・13・14・15・16・17巻解説		"
" 2	" II	"	日本昔話研究集成 1 昔話研究の課題		名著出版
" 3	" III	"	2 昔話の発生と伝播		"
" 4	" IV	"	3 昔話と民俗		"
" 5	" V	"	4 昔話の形態		"
" 6	" VI	"	5 昔話と文学		"
" 7	絵 画 I	"	善光寺大地震図会 永井善左衛門筆		銀河書房
" 8	" II	"	科学新聞 縮刷版 (1984.1~6)		科学新聞社
" 9	" III	"	" " (1984.7~12)		"
" 10	" IV	"	日本語発音アクセント辞典 改訂新版		日本放送出版協会
" 11	" V	"	J I S 総目録 1985		日本規格協会
" 12	建造物 I	"	日本民家語彙集解		日本アソシエイツ
" 13	" II	"	筑波山麓の村		名著出版
" 14	" III	"	屋敷神の世界		"
" 15	" IV	"	支那暦法起源考		第一書房
" 16	" V	"	訂 補 支那古代史論		"
" 17	" VI	"	天文暦法と陰陽五行説		"

東条のあゆみ	長野市立東条小学校開校百周年校舎全面改築完成記念事業実行委員会	〃 第3巻	〃
		〃 第4巻	〃
		〃 第5巻	〃
大町市史	〔自然環境 自然、環境資料〕第1巻	恐竜の百科	平凡社
〃	〔原始、古代、中世 原始、古代、中世資料〕第2巻	日本における近世民家（農家）の系統的發展	奈良国立文化財研究所
〃	〔近世 近世資料〕第3巻	日本民俗文化大系 1 風土と文化 日本列島の位相	小学館
〃	〔近代、現代 近代、現代資料〕第4巻	〃 5 山地と海人 非平地民の生活と伝承	〃
〃	〔民俗、観光 民俗、観光資料〕第5巻	〃 6 漂泊と定着 定住社会への道	〃
再版『伊那』昭和27年度	原田島村	〃 7 演者と観客 生活の中の遊び	〃
昭和28年度	〃	〃 8 村と村人 共同体の生活と儀礼	〃
実測図のすすめ	一芦社	〃 9 暦と祭事 日本人の季節感覚	〃
神奈川考古同人会10周年記念論集	神奈川考古同人会	〃 10 家と女性 暮らしの文化史	〃
恒川遺跡 遺物編・遺構編	飯田市教育委員会	〃 11 都市と田舎 マチの生活文化	〃
古代（復刻版）1分冊	早稲田大学出版部	〃 12 現代と民俗 伝統の姿容と再生	〃
〃 〃 2分冊	〃	〃 13 技術と民俗（上）海と山の生活技術史	〃
〃 〃 3分冊	〃	日本海上交通史の研究	法政大学出版局
〃 〃 4分冊	〃	埋蔵文化財と考古学	平凡社
多摩川水系における川漁の技法と習俗	安南宣伝研究室	天文学辞典	地人書館
天体位置表 昭和62年	海上保安庁水路部	史料館叢書8 真田家家中明細書	東京大学出版会
箕輪町誌 歴史編	箕輪町誌編纂刊行委員会	鼎町史 上巻	鼎町史刊行委員会
松井田町誌	松井田町誌編纂委員会	〃 下巻	〃
新潟県史 通史編1 原始・古代	新潟県	茅野市史 上巻 原始・古代	茅野市
〃 〃 2 中世	〃	高遠町誌 人物編	高遠町誌刊行会
〃 〃 3 近世一	〃	松代町史 上巻	臨川書店
〃 〃 6 近代一	〃	〃 下巻	〃
〃 資料編 24 民俗・文化財三	〃	浮世絵川中島大合戦	白文社
〃 別 編 3 人物編	〃	あしなか 6 第101集～第120集（復刻版）	山村民俗の会
古代探叢 1	早稲田大学出版部	〃 7 第121集～第140集（〃）	〃
原村誌 上巻	原村役場	〃 8 第141集～第160集（〃）	〃
長野県史 近世史料編 第4巻（三）南信地方	長野県史刊行会	〃 9 会報・総目次他	名著出版
〃 近代史料編第5巻（三）五糸系	〃	伊那路 第1巻 1～12号	〃
〃 〃 第8巻（三）社会運動・社会政策	〃	〃 第2巻 1～12号	〃
〃 〃 第9巻 教育	〃	〃 第3巻 1～12号	駒ヶ根市教委
〃 民俗編 第1巻（一）東信地方	〃	昭和60年度 駒ヶ根市誌編さん紀要（第4集） 大沼日記その1	〃
〃 〃 第4巻（二）北信地方	〃	昭和61年度 〃（第5集） 大沼日記その2	〃

長野県方言緊急調査報告書	長野県教育委員会	大鹿村史 下巻	大鹿村誌刊行委員会
大鹿村誌 上巻	大鹿村誌刊行委員会	妙高高原町史	妙高高原町
大鹿村誌 中巻	大鹿村誌刊行委員会	復 刻 高井	高井地方史研究会

2) 自然資料

資 料 名	原 資 料 採 集 地
ナウマン象臼歯レプリカ	浜松市佐浜産
〃	青木村当郷塩之入産
〃	中野市姥懐産
ステゴドン象模型	
野牛（バイソン）	米国フロリダ産
オオカミレプリカ	米国カリフォルニア産

3) 視聴覚資料

16mmフィルム	「住まいのむかしと今」	東映株式会社
ビデオフィルム	「屋根」NHKライブラリー選集	NHKサービスセンター

2 寄贈資料

1) 歴史資料

分 類	資 料 名	頁数	寄 贈 者（敬称略）
兵 事	従軍関係書類	48	渡辺 幸二（篠ノ井）
〃	従軍関係文書	30	〃
雑	「銅板開化玉篇」	1	長野市清掃工場（大豆島）
教育・文化	賞 状	1	藤森 さと（上 野）
〃	書 額	2	藤森 あさ（諏訪市）
村 政	西寺尾村境界見分決定	1	松本 花子（松 代）
支 配	番所用具	1	小池 文雄（松 代）
兵 事	銃 剣	1	長野検察庁（旭 町）
村 政	更級郡共和村議会記録	2	両角 和子（篠ノ井）

たっつけ	1	藤森 治幸 (安茂里)
老眼鏡	1	"
防毒面	1	"
防空用防毒面吸収缶	1	"
登山用雨具	1	"
炭火アイロン	1	"
アイロンごて	8	"
足袋の型紙	55	"
「札法要項」	1	"
「女子日常作法」	1	"
「和服の仕立方一切」	1	"
「愛国足袋の仕立方」	1	"
「足袋・足袋カバー地下足袋裁縫」	1	"
「足袋裁縫早わかり」	1	"
「和服裁縫全集」	1	"
軍 靴	1	"
雄のう	1	"
バリカン	1	"
西洋剃刀	1	"
すきぐし	1	"
研磨液 (バリカン)	1	"
バリカン掃除用ブラシ	1	"
袷着物 (女物)	1	渡辺 幸二 (篠ノ井)
綿入着物 (女物)	1	"
はんでん (女物)	1	"
裃	1	"
長靴	1	"
ゲートル	1	"
軍服 (上 着)	3	"
" (ズボン)	2	"
" (外 套)	1	"
手甲	1	若林 巖 (大塚)
水がめ	1	藤森 治幸 (安茂里)
漬物桶	2	"
しょうゆ樽	2	"
桶	2	"
もろふた	2	"
榊	6	"
煙草筥	1	"
煙草巻筥	1	"
箱 膳	3	"
水切り	1	"
小出し用米櫃	1	"
米あげ笊	1	"

	羽釜	1	〃
	釜敷	1	藤森 治幸 (安茂里)
	煙草盆	1	〃
	五徳	1	〃
	「お惣菜栄養番付表」	1	〃
	水筒	1	〃
	臼	1	西沢 正義 (川中島)
	杵	1	〃
住	屋根瓦		水内 賢 (若 里)
	火 鉢	1	藤森 治幸 (安茂里)
	たらい	1	〃
	炭つぎ	1	〃
	火ばし	1	〃
	十 能	2	〃
	温 石	1	〃
	行 火	1	〃
	手 鏡	1	〃
	がいし	22	〃
	書類入	1	渡辺 幸二 (篠ノ井)
	大 戸	1	山岸 勉 (〃)
	穀ち板	1	藪崎 巖 (松 代)
	穀ち台	1	藤森 治幸 (安茂里)
生産・生業(農耕)	摺 臼	1	高梨 信勝 (青木島)
	脱穀機	1	窪田 博 (松 代)
	送風機	1	〃
(漁撈)	ハコブセ	1	徳武 柳平 (真 島)
	ツ ツ	1	〃
(養蚕)	毛羽取り機	1	北村 俊美 (東風間)
	桑抜根機	1	〃
(染織)	繰上げ台	1	清水 マサ (東 京)
	しほり染機	1	〃
	しほり染図案	20	〃
(染織)	しほり染方説明書	1	〃
(諸職)	ふいご	1	白沢 玉治 (稻 里)
	剣	33	〃
	コークス	1袋	〃
	つち	4	〃
	はし	28	〃
	鍛冶屋道具	一括	若月 正雄 (若 穂)
交 通・交 易	郵便貯金通帳	2	古川 良孝 (篠ノ井)
	郵便積立貯金通帳	1	〃
	農業会貯金通帳	4	〃
	愛国貯金通帳	8	〃
	貯蓄債券	1	〃
	証券保管証	8	〃
	出資証券	〃	〃

信 仰	会員章	1	"
	蚕種小売商看板	8	北村 俊美 (東風間)
	古紙幣	1	上原 喜重 (松本市)
	工場手帳	1	古川 良孝 (篠ノ井)
	貯金通帳	2	"
	永続賞金通知書	1	"
	雇用契約書	1	"
	映画割引券	1	"
	軍事郵便	1	上原 喜重 (松本市)
	町方御用金納番付 (コピー)	1	"
	生繭売買取引許可証	1	酒井 政男 (松 代)
	切歩検定ばかり	1	"
	矢立て	1	"
	樹	2	"
	そろばん	1	藤森 治幸 (安茂里)
	善光寺本堂御内陣登拝証	1	古川 良孝 (篠ノ井)
	戸隠神社種兆札	1	水内 賢 (若 里)
	善光寺信徒会員札	1	"
	神 札	21	渡辺 辛二 (篠ノ井)
	神くじ	2	"
	百万遍数珠	1	"
	仏壇	1	太田 六也 (柳 原)
	千両箱 (塩市縁起物)	1	上原 喜重 (松本市)
	置薬箱	1	水内 賢 (若 里)
民 俗 知 識	氷のう吊り具	1	藪崎 巖 (松 代)
	置薬袋	1	藤森 治幸 (安茂里)
社 会 生 活 芸 能・娛 楽	児童用上開き学習机	2	根羽村教育委員会
	幻燈機	1	藤森 治幸 (安茂里)
	蓄音機	1	"
	竹スキー	2	"
	下駄スケート	2	"
	童話カルタ	1	"
	紙芝居舞台	1	長野市清掃工場 (大豆島)
	紙芝居	2	"
	化粧まわし (相撲取り用具)	1	吉村 初男 (松 代)
	梓 弓 (")	1	"
	扇 子 (")	2	"
	相撲写真 (")	33	"
	つづら (")	2	"
	座ぶとん (")	1	"
儀 札・行 事	御祝儀献立控帳	1	古川 良孝 (篠ノ井)
	祭提灯の屋根	1	藤森 治幸 (安茂里)

4) 文献資料

書	名	寄 贈 者
第15回企画展ほりだされた下野の古代		栃木県立博物館
軽井沢町遺跡詳細分布調査報告書		軽井沢町教育委員会
目で見える江戸の歴史3 海のくらしと道具		八戸市博物館
年報第2号 S59		〃
東北の土人形		〃
国学院大学考古学資料館紀要第2輯		国学院大学考古学資料館
北堂C遺跡・明神堂遺跡		国学院大学文学部考古学研究室
物見処遺跡 1986		〃
相模原の植物分布状況等調査報告書		相模原市教育委員会
相模原の畑作調査報告書		〃
相模原の動物生息状況等調査報告書		〃
埋蔵文化財発掘調査概報集		〃
相模原の地形・地質調査報告書(第3報)		相模原市地形・地質調査会
地学教育 第39巻第3号		日本地学教育学会
〃 第40巻第1号		〃
〃 第40巻第2号		〃
昭和59年度市立市川考古博物館年報		市立市川考古博物館
昭和60年度市立市川考古博物館年報		〃
市川の縄文土器Ⅰ—収蔵の早・前・中期土器—		〃
市立市川考古博物館展示解説		〃
石の文化		〃
小松市立博物館研究紀要第23集		小松市立博物館
所蔵品目録Ⅲ		〃
雪・織物・信濃川		十日町市博物館
十日町の雪の記録から		〃
雪処理の科学技術		〃
子供と民俗行事		〃
十日町織物の歴史と文化		〃
世田谷の古建築現況図		世田谷区教育委員会
下神明遺跡—第5次調査概報—		〃
相之原遺跡		〃
馬引沢(世田谷区民俗調査第6次報告)		〃
長崎市立博物館々報第26号		長崎市立博物館
明神山系遺跡分布調査概報Ⅱ		柏原市教育委員会
高井田横穴群Ⅰ		〃
大県・大県南遺跡		〃
大県南遺跡		〃
相原市埋蔵文化財発掘調査概報		〃
高井田遺跡Ⅰ		〃
烏坂寺一寺域の調査—		〃
姥ヶ沢		中野市教育委員会
中野市遺跡詳細分布図		〃
聖福寺収蔵品目録		福岡市教育委員会
青柳種信関係資料目録		福岡市立歴史資料館

網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録

嘉多山遺跡

日本スキー博物館開館10周年記念誌収蔵資料目録

石川日記（ハ）

八王子市郷土資料館年報

多摩における暦の世界

足柄の民俗（Ⅲ）

中世・近世・近代美術関係資料目録(9)

丹波コレクション版画図録Ⅰ

千駄ヶ原遺跡群1地点

豆尻遺跡

耳川遺跡

ハナイカグという植物

愛媛の自然 第28巻第7号

〃 〃 第8号

〃 〃 第9号

〃 〃 第10号

〃 〃 第11号

〃 〃 第12号

「桑原郷秘録」・他

根室市博物館開設準備室紀要

重要文化財旧開智学校所蔵資料目録

所蔵資料目録 第2集

郷土と博物館 第31巻第1号

〃 第31巻第2号

〃 第32巻第1号

奈良大学考古学研究室調査報告書第6集向原古墳群第6次

松原市遺跡発掘調査概要

信州書芸展図録

清里・長久保遺跡

利根川を下る歴史を遡る

下触牛伏遺跡

荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡

元島名B・吹屋遺跡

人と動物の歴史狩り

群馬県立歴史博物館年報第7号 S60

群馬県立歴史博物館紀要

群馬県立歴史博物館所蔵資料目録

群馬県立歴史博物館調査報告書

上州の温泉

中畦遺跡・諏訪西遺跡

新保遺跡Ⅰ

熊本県立美術館10年の歩み

日田地区遺跡群発掘調査概報

館報（自然史部門）第19号

ガランドヤ古墳群

〃
網走市教育委員会

野沢温泉村日本スキー博物館

八王子市教育委員会

八王子市郷土資料館

〃
神奈川県立博物館

〃
〃

静岡県菊川町教育委員会

〃
〃
愛媛県立博物館

〃
〃
〃
〃
〃
〃

新右衛門屋敷・象山桑原記念館

根室市博物館開設準備室

松本市教育委員会

〃
鳥取県立博物館

〃
〃

奈良大学考古学研究室

松原市教育委員会

信州書芸会

群馬県埋蔵文化財調査事業団

〃
〃
〃

群馬県立歴史博物館

〃
〃
〃
〃
〃

群馬県教育委員会

〃
熊本県立美術館

日田市教育委員会

〃
〃

もめんいろいろ
 常設展示資料目録
 年報 S 60版
 時を知るこよまと和時計
 国見山極楽寺
 北上川とその流域に生きた人々
 塩崎遺跡群Ⅳ
 浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB・C・D地点
 長野市の同和教育 第11
 長野市同和教育資料集 友だち
 長野県埋蔵文化財センター 年報 2
 所蔵品目録
 館報 No. 5
 まちづくりアンケート
 長野市の人口
 長野県民俗関係文献目録第3集
 信濃出土の土器に書かれた文字
 ふるさとの歴史
 信濃国分寺跡のあらし
 創置の信濃国分寺跡 推定地確認調査概報Ⅳ
 五反田遺跡
 染屋台条里水田跡遺跡 金井裏遺跡・殿田遺跡
 上田の歩み
 上図藩の人物と文化
 長野地域の地質
 九州歴史資料館 研究論集11
 九州歴史資料館 年報
 ふるさとの祭り
 北宿・馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書
 馬場東・馬場小室山遺跡発掘調査報告書
 南宿北跡発掘調査報告書
 三室・松木・松木北遺跡発掘調査報告書
 馬場小室山・三室遺跡発掘調査報告書
 大久保条里遺跡発掘調査報告書(第1次)
 三室遺跡(第5次)発掘調査報告書
 白幡本宿遺跡発掘調査報告書
 鶴巻遺跡・駒形遺跡発掘調査報告書
 ちゅうるい S 61一村勢要覧
 小山市博物館報第2号 S 59年度
 掘りおこされた中世の生活
 小山市立博物館報第3号 S 60年度
 吉田富夫コレクション
 館蔵品図録Ⅰ
 信濃 御殿田
 朝臣 洞窯跡
 信濃土器洞窯跡
 飯田風越窯址
 町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

東大阪市立郷土博物館
 苫小牧市博物館
 〃
 大田区立郷土博物館
 北上市立博物館
 〃
 長野市教育委員会
 〃
 〃
 〃
 長野県埋蔵文化財センター
 長野県信濃美術館
 〃
 長野市
 〃
 長野県史刊行会
 上田市立信濃国分寺資料館
 〃
 〃
 上田市教育委員会
 〃
 〃
 上田市立博物館
 〃
 地質調査所
 九州歴史資料館
 〃
 岐阜県博物館
 浦和市遺跡調査会
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 忠類村役場
 小山市立博物館
 〃
 〃
 〃
 名古屋市博物館
 名古屋市見晴台考古資料館
 下伊那歴史考古学研究所
 〃
 〃
 〃
 飯田市教育委員会

読谷村立歴史民俗資料館 紀要 第10号

埼玉県立自然史博物館研究報告

国立歴史民俗博物館研究報告第7集

〃 第8集

〃 第9集

〃 第10集

〃 第11集

近世の小袖意匠

歴博 第18号

〃 第19号

〃 第20号

〃 第21号

半田市立博物館 展示解説

〃 年報 S60

研究紀要 No.9

市民の手による川崎市域自然調査の報告 S60

〃 S59

川崎市青少年科学館年報 S59 No.2

〃 S60 No.3

生田緑地の自然観察(1)

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 16

高森遺跡

柳久保遺跡群II

〃 III

総社桜ヶ丘遺跡

南山浦古墳群調査報告書

かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書

南三島遺跡6-7区(上)(下)

収蔵資料目録

飯能の仏像I

〃 II

飯能の遺跡(1)

〃 (2)

〃 (3)

飯能の指定文化財

飯能市遺跡分布調査報告書

豊岡市文化財調査概報集

長谷・ホウシ古墳群・妙楽寺・見手山横穴墓群

西裏・竹田峯

池畑・西御堂

栗毛坂遺跡群芝間

宮崎県総合博物館収蔵資料目録(動物・地質編)

〃 (植物編)

山口県の自然 第5巻第6号

山口県立山口博物館研究報告

山口県文化財 第16号

〃

埼玉県立自然史博物館

国立歴史民俗博物館

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

半田市立博物館

〃

〃

川崎市教育委員会

〃

〃

〃

川崎市青少年科学館

奈良国立文化財研究所

武生市教育委員会

山武考古学研究所

〃

〃

高松市教育委員会

〃

茨城県教育財団

飯能市教育委員会

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

豊岡市教育委員会

〃

佐久市教育委員会

〃

佐久市埋蔵文化財調査センター

宮崎県総合博物館

〃

山口県立山口博物館

〃

山口県文化財愛護協会

下須川の民俗
 特別展 黒曜石
 俎原遺跡
 吉田川西遺跡
 瀬ノ神・栗木沢・砂田
 平出遺跡
 紀要 第3集
 中野遺跡発掘調査報告書
 喜志遺跡発掘調査概要Ⅰ
 中野遺跡発掘調査概要Ⅱ
 嶽山遺跡発掘調査報告書
 錦聖遺跡発掘調査報告書
 中野遺跡発掘調査概要Ⅴ
 嶽山山頂遺跡発掘調査報告書
 喜志西遺跡発掘調査概要
 中野遺跡・宮林古墳発掘調査概要
 研究論集Ⅳ
 竪穴式石室の地域性の研究
 年報 5 S60
 大久保A遺跡 大久保B遺跡
 細原遺跡
 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡
 屋代B遺跡Ⅰ
 大境遺跡
 小場遺跡
 南三島遺跡
 南三島遺跡6—7区(上)
 " (下)
 郷土ゆかりの巨匠展
 柏崎市立博物館 館報No.1
 日本の民芸百選展
 離島
 '86 要覧
 久留米市埋蔵文化財調査集報(Ⅰ)
 厚木の民俗5 —ことば—
 沼津兵学校
 館報 S60
 研究連絡誌
 研究紀要 10
 野尻文化と氷河時代の自然
 難波田氏館跡発掘調査報告書
 富士見市遺跡群Ⅳ
 研究紀要
 貝塚山遺跡発掘調査報告書
 " 第2地点
 相模川流域の自然と文化
 水稻品種変遷の冷害史からの考察
 研究紀要 第3号

山口大学常民文化研究会
 下諏訪町立博物館
 塩尻市教育委員会
 "
 "
 "
 塩尻市立博物館
 富田林市教育委員会
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 東京都埋蔵文化財センター
 都出比呂志
 茨城県教育財団
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 "
 柏崎市立博物館
 "
 "
 北海道開拓記念館
 "
 久留米市教育委員会
 厚木市教育委員会
 沼津市明治史料館
 秋田県立博物館
 千葉県文化財センター
 "
 新潟県立自然科学館
 富士見市教育委員会
 "
 富士見市遺跡調査会
 "
 "
 平塚市博物館
 岩手県立農業博物館
 神戸市立博物館

馬場惣A遺跡Ⅰ
研究紀要 1
和歌山市立博物館館報
みちのくの大画 一近世の障壁画と屏風絵一
仙台市博物館調査研究報告第6号
仙台市科学館 時報
ミクロの世界
天竜川
本村遺跡発掘調査報告書
蜆塚遺跡Ⅴ・Ⅵ
富塚地蔵平1号墳発掘調査報告書
浜松市山の神遺跡発掘調査報告書
五輪堂遺跡Ⅲ
杜宮司遺跡
南沖遺跡Ⅱ
年報 S57～S59
研究報告 6
" 7
耳取城跡・古城遺跡
房総風土記の丘年報 9 S60
タッチ・ザ・ニホンカイ・
第5回特別展 古鏡の美～出土鏡を中心に～
福井県立博物館 年報第1号 S59・60年度版
江戸の化粧道具展
アジアの風展
博物館講演集 第2集
武相の鰐口
鈴木満 回顧展
民具と生活
広重版画名作展
火の昔展
明治初期 石版画展
みの・かさ・ばんどり展
木の民具展
和鏡
町田市仏像調査報告書Ⅰ
明治の新聞展
町田市仏像調査報告書Ⅱ
明治の女優展
研究連絡誌
京都府埋蔵文化財情報第19
那覇市歴史地図
羽根尾堰ノ上遺跡
埋蔵文化財発掘調査報告書
不動坂遺跡群Ⅱ 古屋敷遺跡群Ⅱ
上の原遺跡群Ⅱ
太宰府条坊跡Ⅲ

県立歴史資料館
和歌山市立博物館
"
仙台市博物館
"
仙台市科学館
富山市科学文化センター
浜松市博物館
浜松市教育委員会
"
"
"
更埴市教育委員会
"
"
岡山県立博物館
"
"
小諸市教育委員会
千葉県立房総風土記の丘
福井県立若狭歴史民俗資料館
福井県立博物館
"
町田市立博物館
"
"
"
"
"
"
"
"
"
"
博物館 明治村
千葉県文化財センター
京都府埋蔵文化財調査研究センター
那覇市教育委員会
小田原市教育委員会
"
東部町教育委員会
"
太宰府市教育委員会

青水台遺跡	郡山市教育委員会
三六段遺跡	〃
郡山東部 6	〃
北山田遺跡	〃
北山田 2 号墳	〃
下永田 B 遺跡	〃
県営ほ場整備事業関連発掘調査概報	〃
飛鳥の石造物	飛鳥資料館
豪將軍塚古墳第 5 次 1985	更埴市教育委員会
菊沖遺跡Ⅱ	〃
土宮司遺跡	〃
馬口遺跡	〃
研究紀要 第 3 号 1986	栃木県立博物館
中山道本陣展	軽井沢町追分宿郷土館
要覧	石川県立歴史博物館
86 要覧	北海道開拓記念館
いたばしの絵馬と扁額	板橋区教育委員会
坂橋区立郷土資料館紀要第 5 号	〃
茂呂遺跡 C 地点確認調査報告	〃
志村坂上遺跡第三次調査報告	〃
収蔵品目録 第 1・第 2	黒川古文化研究所
〃 第 3	〃
〃 第 4・5・6・7	〃
〃 第 8・9	〃
〃 第 10	〃
〃 第 11・12	〃
〃 第 13	〃
創立 10 周年記念誌	〃
黒川古文化研究所要覧	〃
郷土の絵馬展	松本市立博物館
大津市文化財散歩	大津市教育委員会
大津の文化財	〃
昭和の大修理勸進 善光寺展	共同通信社
市原市史 中巻	市原市教育委員会
なつかしの音 蓄音機	太田区立郷土博物館
兆山・江戸の美 東京国立博物館巡回展	東京国立博物館
秋季特別展 江沼九谷 色絵の系譜展 図録	加賀市美術館
S61 年度 特別展 日本の古窯	岡山県立博物館
真珠博物館	御木本真珠島
縄文真珠 ―5500 年の謎	〃
解説と資料 松代大本営 学習資料 No. 1	松代大本営資料研究会
環境情報科学 '85 14―3	(社)環境情報科学センター
尾花沢の歴史と文化 第 1 号	尾花沢市地域文化振興会
〃 第 2 号	〃
丘江出土の施釉陶器	滋賀県立近江風土記の丘資料館
明治大学刑事博物館年報 17	明治大学刑事博物館
明治大学刑事博物館資料第 8 集 S61・2	〃
館報 No 2	明治大学考古学博物館

館報開館 5 周年記念

権現谷窯跡

清野小学校開校百年誌

よみがえる古墳

館報 第 3 集

〃 第 4 集

展示解説集 道しるべ 第 4 集

〃 海南と熊野みち 第 5 集

田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要

柏原市文化財概報 1986—IV

わたしたちの生活と家具

大潮会50周年記念小史

信州の鉄道物語

綾羅木郷遺跡 I

西宮の年中行事

西宮の民家

発掘20年のあゆみ

第20回現代美術選抜展

動物標本目録 1

氷見の絵馬展

氷見の獅子頭展

年報 第 4 号

広瀬井手日記(一)

室川貝塚

収蔵資料目録 第 6 集

柴田方庵 目録概要

第34回全国博物館大会報告書

博物館指導者協議会報告書

研究報告 第 9 巻

上越市立小沢博物館

伊万里市教育委員会

清野記念事業推進委員会

佐野市郷土博物館

海南市立歴史民俗資料館

〃

〃

〃

柏原市教育委員会

栃木県立博物館

大潮会

信濃毎日新聞社

下関市教育委員会

西宮市教育委員会

〃

東大阪市教育委員会

六光社

山形大学附属博物館

氷見市立博物館

〃

〃

別府大学付属博物館

沖縄市教育委員会

日立市郷土博物館

日立市郷土博物館

日本博物館協会

〃

香川県自然科学館

3 寄託資料 (契約改定：昭和62年 4 月 1 日～昭和65年 3 月31日)

名 称	数量	寄 託 者
両耳付甕形土器	1	島田ちづ枝(信更町)
土 器 片	2箱	〃
打製石斧	11	〃
横刃形石器	5	〃
スクレイパー	8	〃
石 鏃	6	〃
箱清水式土器大壺	1	穂苅綱夫(篠ノ井)
〃 丹塗壺	1	〃
埴輪円筒棺	1	川柳將軍塚保存会

名 称	数量	寄 託 者
湯ノ入遺跡出土壺	3箱	南沢将男
〃 甕	5	〃
〃 浅鉢	1	〃
〃 埴	1	〃
国鉄車輛基地遺跡出土壺	3	神保美見(中 越)
〃 甕	3	〃
〃 小形甕	2	〃
〃 甕	1	〃
〃 蓋	2	〃

口留番所(党一正徳3年)	1	鈴木守雄(小川村)	銅 銚	1	小島貞雄(篠ノ井)
穀物通切手(木製)	1	"	銅銚石製模造品	1	"
馬通切手(木製)	1	"	子持勾玉	3	更級横田神社
和田英肖像画写真	1	和田一雄(町田市)	土 鍾	1	"
和田英自筆原稿六工社寄宿人名簿	4	"	カップ形土器(須恵器)	1	清野小学校
富岡日記(続)一部清書	3	"	獸脚付羽釜	1	寺尾小学校
" 六工社創業2年目の春原稿	11	"	平 瓦	2	田中繁躬(篠ノ井)
" 第2年目開業原稿	10	"	丸 瓦	2	"
わが母の記原稿	7	"	彦神別神社遺跡之図	1	関川千代丸(三輪)
御雇仏国人フムエナ条約書写	16	"	善光寺本堂図面	1	"
写 真	2	"	善光寺如来堂造営木寄帳	1	霜田常雄(中御所)
善光寺道標	1	三才区	善光寺如来堂木寄不足帳	1	"
伝馬宿書出し(慶長16年9月3日)	1	本井弘己(若 穂)	善光寺造営御用一卷	1	"
川田宿並附近古図	1	"	善光寺如来堂造営	1	若森績千冬(元善町)
和田英富岡日記	1	中沢 泉(桐 原)	諸色入料勘定帳		
" 六工社創立第1年の巻	1	"	文禄4年中氷範村下氷範村御検地帳	1	青木修一郎(稲里町)
上ヶ屋 a 石器群	18	森嶋 稔(戸倉町)	山 車	1	西町上区
" b 石器群	16	"	双体道祖神(石造)	1	相沢忠男(松代町)
" c 石器群	14	"	近世～近代古文書	30	柳島利雄(丹波島)
" d 石器群	10	"	煙火打上用筒木製 (大正5年)二尺玉用	1	長野市商工会議所
神子柴型石斧	1	清水一男(松代町)	" 尺玉用	1	"
風 字 硯	1	"	春雷筒記鑄鉄(大正10年9月)	1	"
(旧)尖頭器	1	信田小学校	妻科庚申講人別帳	1	井上 蛟
(平)古瓦(平・丸・鑑)	3	"	蛙打切り文書	3	大豆島区
(縄)垂玉	1	"	阿久遺跡出土深鉢	1	長野県教育委員会
石 鉢	8	熊井恒雄(浅 川)	大石遺跡出土深鉢	1	"
石匙(縦形3・横形3)	6	"	明治時代の自転車	1	和田康雄(西長野)
石 錐	4	"	看板(おきやらの油)	1	"
凹 石	2	"	素環頭太刀	1	依田ノブ・依田修一(保科)
打製石斧	3	"	内反太刀	1	"
磨製石斧	4	"	甲越信戦録(巻壺～八)	4	高田竹千代(青木島町)
直 刀	5	浅川東条公民館	近世末～近代初期古文書	265	矢島 一(岩石町)
刀 子	6	"	小倉百人一首	40	藤森幸子(安茂里)
鉄 鍬	13	"	当村御高所持人別帳(文久3年)	1冊	岡沢益雄(川中島町)
轡	2	"	往来左右家別絵図	1枚	"
金 環	3	"	軒別間取図	3冊	"
勾 玉	2	"	" (蓮香寺)	1枚	"
管 玉	9	浅川東条公民館	茶白山エオリス	1	大田繁則(山布施)
丸 玉	5	"	魚類(リコプテラ)化石	1	"
ガラス玉(大)	12	"	三葉虫(エルラシア)	1	"
" (小)	8	"	メノウ(リオグランデ産)	2	"
滑石製小玉	11	"	ケイ化木	3	"
土 鍾	1	"	石灰華	2	"
伊勢宮遺跡出土扁平片刃石斧	1	塩崎文化財保存会	ノジュール	1	"
" 太形蛤刃石斧	1	"	ケイ化木	2	生島高俊(桐 原)
" 打製石斧	1	"	魚類化石	1	内田隆徳(川中島町)
" 打製石包丁	3	"	"	1	千野和彦(川中島町)
" 石鏃	3	"			

節	内 訳	予算額	運 営 費		事 業 費				A事業費	自然史館
			運 営	管財課配当替	鏡の文化	のりもの今昔	農家とくらし	各種講座		
(1)報 酬		1,927	1,927							
(2)給 料		20,948	20,948							
(3)職 員 手 当 等		13,120	12,571		120	135	100	150		44
(4)共 済 費		6,031	5,586							445
(7)賃 金		15,979	11,280		180	579	150			3,790
(8)報 償 費		1,640	155		300	670	200	255		60
(9)旅 費		874	300		100	350	80	14		30
(11)需 用 費		37,322	29,616	289	550	1,190	670	50	270	4,687
(消 耗 品 費)		(2,904)	(2,008)	(66)	(40)	(100)	(50)	(40)	(270)	(330)
(燃 料 費)		(5,004)	(3,985)	(152)						(867)
(食 糧 費)		(160)	(55)		(10)	(50)	(20)	(10)		(15)
(印 刷 製 本 費)		(5,362)	(2,772)		(500)		(600)			(450)
(光 熱 水 費)		(23,202)	(20,202)			(20)				(3,000)
(修 繕 料)		(680)	(589)	(71)		(600)				(20)
(医 薬 材 料 費)		(10)	(5)							(5)
(12)役 務 費		6,212	568		350	4,500	350			444
(13)委 託 料		21,436	17,696		400	900	300		300	1,840
(14)使用料及び賃借料		954	356		200	240	100	20		38
(15)工 事 請 負 料		3,650	100		200	300	150		2,900	
(16)原 材 料 費		450			100	300	50			
(18)備 品 購 入 費		4,200	1,500			150	150		2,200	200
(19)負担金及び交付金		162	162							
(27)公 課 費		9		9						
計		134,914	102,765	298	2,500	9,314	2,300	489	5,670	11,578

A事業…外灯増設工事・案内板補修工事・収蔵庫棚増築工事・赤外線ビデオ装置購入など

2 管理委託業務

(単位千円)

名 称	金 額
空調設備等管理	5,450
し尿浄化槽管理	648
清掃業務(本館)	5,920
〃(自然史館)	1,600
自家用電気保安点検	379
エレベーター保守点検	576

警備業務(本館)	384
〃(自然史館)	200
庭園管理業務	513
くん蒸処理	1,500
プラネタリウム保守点検	770
ターボン冷凍機保守点検	500
合 計	18,440

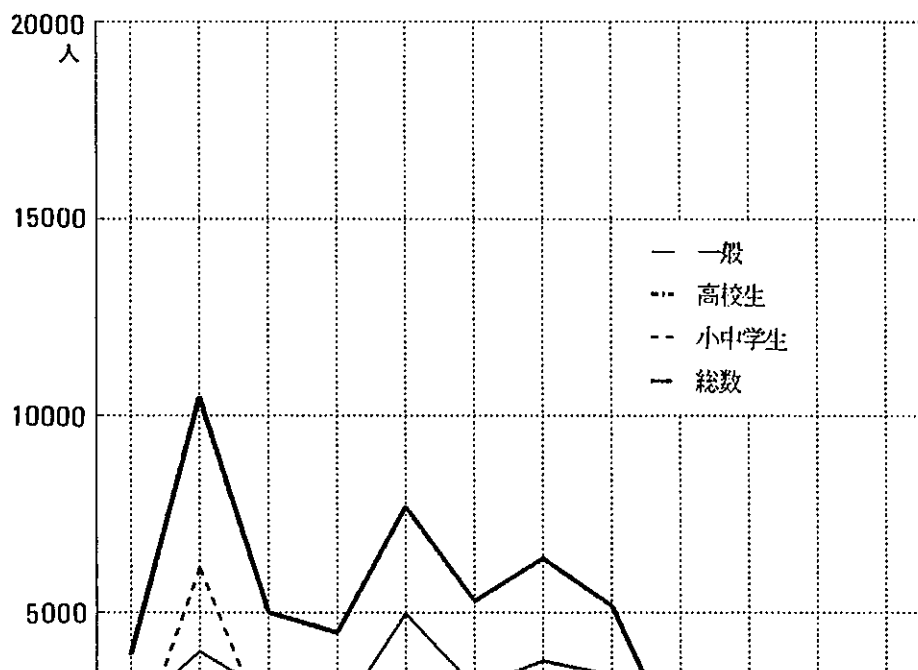
3 入館者状況

(昭和61年4月～昭和62年3月)

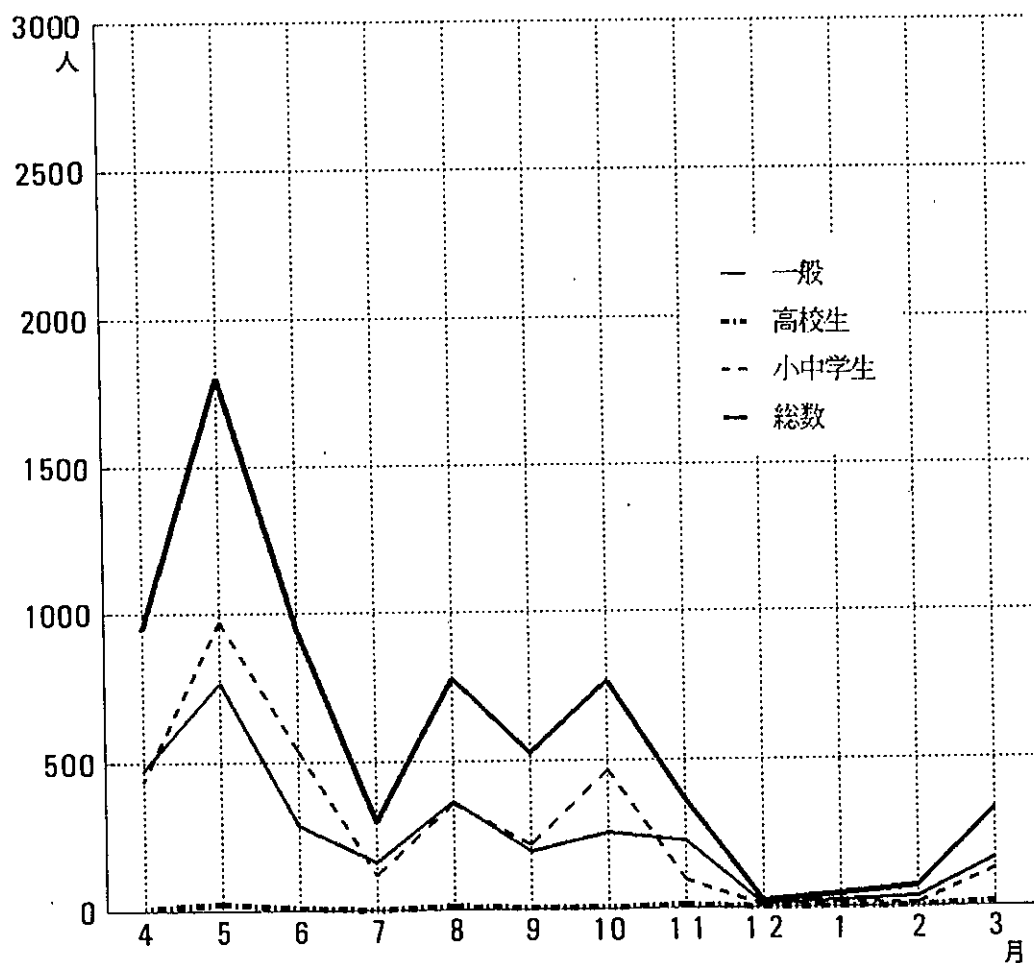
1) 博物館常設展示

常設展示月別入館者数

区分	個 人			団 体			合 計			視察等	総合計	開館 日数	一日 平均
	一 般	高校生	小中学生	一 般	高校生	小中学生	一 般	高校生	小中学生				
4	1,825	85	979	624	84	203	2,449	169	1,182	128	3,928	26	151
5	2,643	101	1,247	1,361	44	4,898	4,004	145	6,145	156	10,450	27	387
6	1,368	36	600	1,586	0	1,266	2,954	36	1,866	141	4,997	25	200
7	1,270	60	432	1,013	639	1,013	2,283	699	1,445	71	4,498	27	167
8	3,594	234	1,896	1,377	11	416	4,971	245	2,312	178	7,706	27	285
9	1,538	35	632	1,555	0	602	3,093	35	1,234	941	5,303	25	212
10	1,615	40	652	2,162	81	1,743	3,777	121	2,395	98	6,391	27	236
11	1,705	47	463	1,697	0	880	3,402	47	1,343	395	5,187	26	199
12	502	28	181	118	0	446	620	28	627	123	1,398	24	58
1	494	12	175	0	0	0	494	12	175	9	690	17	41
2	860	29	290	45	0	484	905	29	774	48	1,756	23	76
3	1,517	88	911	227	0	0	1,744	88	911	69	2,812	26	108
計	18,931	795	8,458	11,765	859	11,951	30,696	1,654	20,409	2,357	55,116	300	183



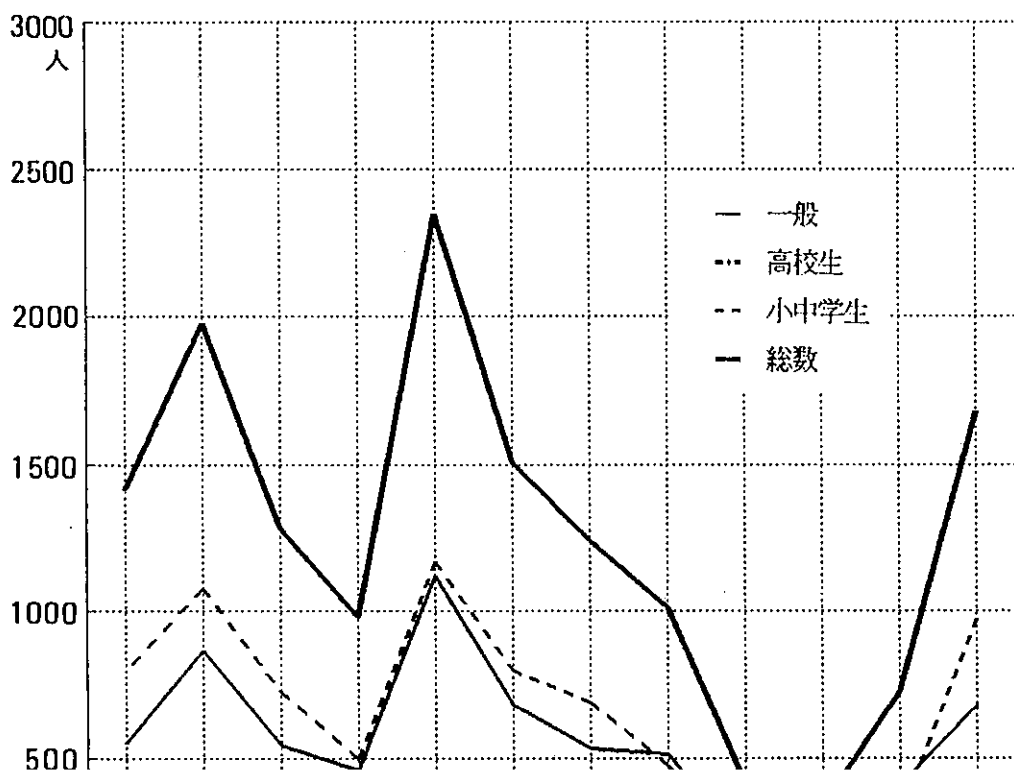
6	236	5	175	48	3	362	284	8	537	110	3	942	25	38
7	107	3	75	56	0	44	163	3	119	9	4	298	27	11
8	366	14	338	1	0	19	367	14	357	34	3	775	27	29
9	196	6	101	0	0	115	196	6	216	104	3	525	25	21
10	225	7	177	32	0	292	257	7	469	34	0	767	27	28
11	175	14	98	53	0	0	228	14	98	25	1	366	26	14
12	12	0	10	0	0	0	12	0	10	3	0	25	24	1
1	25	0	18	0	0	0	25	0	18	2	0	45	22	2
2	36	2	13	0	0	0	36	2	13	19	1	71	23	3
3	163	18	127	0	0	0	163	18	127	21	0	329	26	13
計	2,650	101	2,088	320	4	1,288	2,970	105	3,376	406	32	6,889	305	23



3) 天体学習室（プラネタリウム）

プラネタリウム投影月別入館者数

区分	個 人				団 体					合 計				実施回数 (回)	一回平均 (人)
	一般	高校生	小中学生	合計	一般	高校生	小中学生	合計	件数	一般	高校生	小中学生	合計		
4	538	27	741	1,306	12	42	58	112	2	550	69	799	1,418	33	43
5	766	32	828	1,626	102	0	250	352	6	868	32	1,078	1,978	40	50
6	472	15	530	1,017	71	0	195	266	4	543	15	725	1,283	31	41
7	394	23	361	778	66	0	135	201	4	460	23	496	979	33	30
8	1,123	55	1,170	2,348	0	0	0	0	0	1,123	55	1,170	2,348	59	40
9	666	26	734	1,426	16	0	65	81	2	682	26	799	1,507	38	40
10	417	22	425	864	114	0	264	378	8	531	22	689	1,242	32	39
11	511	22	456	989	5	0	17	22	1	516	22	473	1,011	40	25
12	191	6	179	376	4	0	29	33	1	195	6	208	409	23	18
1	196	4	140	340	0	0	0	0	0	196	4	140	340	22	15
2	368	9	282	659	40	0	25	65	2	408	9	307	724	27	27
3	675	25	943	1,643	4	0	31	35	1	679	25	974	1,678	38	44
計	6,317	266	6,789	13,372	434	42	1,069	1,545	31	6,751	308	7,858	14,917	416	36



開 催 日 数	入 館 者 計	1 日 平 均
58日	17,048人	294人

(2) 第13回企画展「鏡の文化」

昭和61年 7 月20日～ 8 月31日

開 催 日 数	入 館 者 計	1 日 平 均
37日	5,572人	151人

(3) 第14回特別企画展「のりもの今昔」

昭和61年10月 5 日～11月24日

区 分	一 般	高 校 生	小中学生	合 計
個 人	3,248	43	1,288	4,579
団 体	277	0	2,094	2,371
合 計	3,525	43	3,382	6,950

開催日数44日 1日平均158人

(4) 第15回企画展「農家とくらし」

昭和62年 2 月15日～ 3 月29日

開 催 日 数	入 館 者 計	1 日 平 均
37日	3,702人	100人

4 利用状況

1) 資料の館外貸出し

貸出番号	貸 出 先	貸 出 資 料 名	点数
61-01	上田市立信濃国分寺資料館	田中窯址出土瓦	2点
02	共同通信社	白鳳期の善光寺瓦	2点
03	信更中学校	上和沢遺跡出土神子柴形石斧ほか	8点
04	中央公論社	塩崎遺跡群出土木棺墓の写真フィルムほか	3点
05	大豆島小学校	四ツ屋遺跡出土弥生式土器ほか	18点
06	須坂ハイランド星を見る会	ハレー彗星写真パネル	5点
07	屋代高校天文班	ハレー彗星写真パネル	7点
08	上田市立信濃国分寺資料館	清野小学校校舎地点出土墨書土器ほか	31点
09	長野県史刊行会	須坂市鎧塚古墳出土の方格規矩四神鏡の紙焼ほか	14点
10	新潟県立自然科学館	上ヶ屋遺跡出土石器	8点
11	篠ノ井西中学校	銅銚・石製模造銚の紙焼	1点

2) 資料等の特別利用

利用番号	申 請 者 名	利 用 資 料 名	点数	利用の方法	利用月日
61-01	神戸市議会	常設展示		写真撮影	4月22日
02	(社)家の光協会	大岡村芦ノ尻道祖神	1	写真撮影・掲載	〃
03	長野工業高校建築科	博物館建物		写真撮影	5月14日
04	(社)長野青年会議所	博物館建物、施設、常設展示		〃	5月27日
05	長野市広聴課	博物館施設、常設展示		写真撮影・掲載	5月30日
06	更北中学校	松代地震観測所模型	1	写真撮影	6月3日
07	角川春樹事務所	常設展示		〃	6月4日
08	読売新聞長野支局	来館された身障者の取材		〃	6月6日
09	松本市立旭町小学校	常設展示		〃	6月12日
10	斉藤智子(長野市)	〃		〃	6月12日
11	松田清(高知大学人文学部助教授)	佐久間象山関係資料	8	〃	6月13日
12	長野市議会事務局	常設展示		〃	7月9日
13	〃	〃		〃	7月10日
14	松代大本営資料研究会	松代地震観測所模型	1	写真撮影・掲載	7月17日
15	長野市議会事務局	常設展示		写真撮影	8月5日
16	中島志郎(東京都)	〃		〃	8月6日
17	箕輪町郷土博物館	〃		〃	8月19日

31	信大附属長野小学校	街道と旅 大名行列	3	写真撮影・複写	1月6日
32	伊藤教夫	農具・生活用具関係		〃	1月9日
33	羽田晋一	はた織り実演		写真撮影	2月8日
34	南長野新聞社	〃		〃	2月8日
35	信濃毎日新聞社	石臼、いろり、猫足膳	3	写真撮影・掲載	2月19日
36	西本桃代	土器類		写真撮影・模写	2月22日
37	小境早治（富山県）	常設展示		写真撮影	3月13日
38	坂口鶴雄（長野市）	企画展「農家とくらし」展示		写真撮影・掲載	3月14日
39	関 鶴二（明科町）	常設展示		写真撮影	3月17日
40	小林武司（長野市）	〃		〃	3月28日
41	島田茂文	夜具		〃	3月28日

V 彙 報

1 長野市立博物館協議会

1) 協議会委員

（任期 昭和61年9月25日から2年間）

職 名	氏 名	役 職	選 出 区 分
会 長	花 岡 直 一	元長野市教育長	学校教育(歴史)
副会長	小出ふみ子	長野市文化芸術協議会副会長	社会教育(文芸)
委 員	浅 川 欽 一	長野市文化財保護審議会委員	学識経験(民俗)
〃	倉 田 稔	長野市後町小学校長	学校教育(動植物)
〃	小林計一郎	長野郷土史研究会々長	社会教育(地方史)
〃	瀬 戸 仁	信州大学教育学部教授	学校教育(国語教育)
〃	島 垣	信州大学工学部教授	〃 (地震)
〃	中 島 正 美	元長野県教育次長	学識経験
〃	矢 沢 頼 忠	松代藩文化施設管理事務所々長	社会教育
〃	米 山 一 政	長野市文化財保護審議会々長	学識経験(歴史)

2) 審議会審議経過

昭和61年10月30日開催

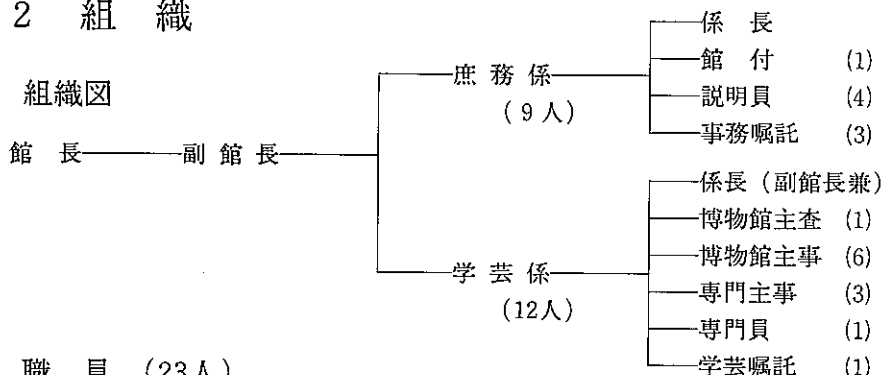
- (1)正副会長の選出について
- (2)博物館の運営について
- (3)その他

昭和62年 3 月 5 日開催

- (1)博物館運営及び62年度事業計画について
- (2)その他

2 組 織

1) 組織図



2) 職 員 (23人)

館 長	掛川 一夫
副 館 長	山口 純一
庶務係長	佐野 孝康
館 付	深沢 辰雄 (7月異動)
説 明 員	清水 正志
"	藪崎 巖
"	相原 敬子
"	水品 紫乃
事務嘱託	水島千恵子
"	工藤 幹雄 (自然史館)
"	両角 和子 (")
学芸係長	(山口純一)
博物館主査	矢口 忠良 (学芸員、考古)
博物館主事	山口 明 (" 、考古・民俗)
"	大蔵 満 (" 、自然)
"	青木 和明 (" 、考古)
"	安室 知 (" 、民俗)
"	唐沢 茂 (" 、自然・自然史館)
"	千野 浩 (" 考古)

昭和に入ってもまだ鏡に対するタブーはいくつか残っています。例えば鏡を使った遊び、光を反射させて人の目を射る、という様な遊びを行いますと叱られたわけです。それは単に、その人に対して失礼である、というだけでなく、鏡というものを、そういう遊びに使ってはいけない、という面から叱られたんだという気がしています。

有名な落語に、「松山鏡」がありますが、私は子供の頃、島崎藤村の童話の中で、松山鏡の話を聞いております。確か、母の形見という構成がとられていたかと思いましたが、つい最近になりました。その原本が、中世の謡曲の「松山鏡」にある、ということをやよく知りました。

また、講談本には豪傑の怪物退事があります。猫が老婆に化けている。それが手傷を負っていて鏡をのぞきこんでは唾をつけている。その鏡の中に映っているのは猫の顔である、という様な話です。

私のような年令の者においても、この程度の経験があるわけですから、恐らく民俗学の先生方からご教示をいただければ、鏡に対するタブーなどというようなものの資料は極めて豊富に提供されるのではないかという感じがします。

この様な鏡に対する一時代前の人々の考え方というものの、それから、現在我々の頭の中に潜在している鏡に対する意識、こういうものを民俗学の援用で、まず集成してみる、整理をしてみる。ちょうど槽の中に簀を入れまして紙を漉く様に我々の周りにある鏡に対するタブーを集めていってみる。

少し飛躍しますが、この様な鏡に対する関心、タブーというものは、時間がさかのほればさかのぼるほど色濃くなるものではないだろうか、現在残っている鏡に対する気持ちというものを、もっと増幅したようなものが古代人の鏡に対する気持ちではないだろうか、とそういう仮定にもとづいて資料を探ってみたらどうだろうか。極端な言い方かもしれませんが、我々の意識の中にあるものを増幅させていったものが、古代人の鏡に対する観念というものになるのではなかろうか、という仮定をまず立てまして、資料を探ってみるのも一つの研究方法ではなかろうか、ということです。

そこでまず現在からさかのぼって、近世・中世・古代・と鏡に対する観念を探っていくわけですが、まず現在の民俗の源流は、民俗学の先生のご意見によりますと、中世後半の室町時代くらいまではいくだろう、ということです。現在の我々の中にある意識は、14世紀の半ば位までさかのぼらせてよい。ところで室町と鎌倉の間には、大きなヒヤタスがある。それを乗り越えれば案外スムーズに古代まではいける、ということでもあります。

さて、自分そっくりのものがある面の上に映し出される。そういうものを一時代前の人々は、何と呼んでいたかと申しますと、これを「影」という言葉で呼んでいたことがわかっております。その「影」が、リアルであればリアルであるほど、自分の靈魂はそちらに移っていつてしまう。魂を奪われるということは生命を失うことに通ずる、ですから現在でも一部の方の中に写真に撮られることをいやがる人がおります。

この様な例を中世の中で探してみましたら、1例ありました。中世の初め、古代の終わりと言ってよいかもしれません。九条兼実という人物があります。摂政関白太政大臣のお公家さんで鎌倉の源頼朝と通じている人物です。彼は有名な『玉葉』という日記を書いておりますが、その中の承安

3年(1173)9月9日のところに、「藤原隆信によって面相を映されなかったのが第一の冥加である。ということが書かれております。藤原隆信は高名な似絵(肖像画)の絵師ですが、九条兼実はこの藤原隆信によって自分の肖像画がかかれなかったことが一番ありがたいことであったんだ、といっております。また同じ年の12月7日にも似た様な記事があります。最勝光院というお寺の障子絵に、やはり藤原隆信がお公家さん達の肖像画を何枚も書いておりますが、その肖像画があまりにもリアルなので、絵にかかれた公家達が、不吉であるのでその障子絵のある部屋の戸をあけてもらっては困る、と言っている。この様に、古代の終りの頃のお公家さん達は、己れの面貌がリアルに描かれている肖像画に恐れおののいている。この様にみえますと、源氏物語絵巻や信起山縁起などを見ますと、庶民の顔は割合にリアルにかかれているのに、公家達の顔は、引目鉤鼻という没個性的にしかかかれていない、その人の絵姿、影というものには、恐らくそこに本体から離れた魂が移っているということを認めているわけであります。

この九条兼実の感慨を鏡に適用させてみます。『古今集』には鏡への想いをこめた歌がいくつかあります。「怨みても、泣きても言はむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして」など是有名です。平安時代もまだ始めの頃、延喜4年に詠まれたうたであります。鏡と言えは必ずそこに出てくる言葉が「影」で、鏡と影は一对になって出て参ります。現代風に申しますと、「あの人を恨んでも悲しさに泣いても相手がいないことにはどうにもならない」、という意味になりましょうが、その歌のニュアンスというものの、それは鏡に映った影というものを相当に意識しております。鏡というものは、似絵と同様に魂をぬきとるものなのだ、という様なことを詠んだ『古今集』をみますと感じるわけです。鏡に対するうたは『古今集』に5首か6首あがってきます。どの歌をみましても、鏡が出てくればそれに対しては影、影見という言葉が必ず出て参ります。余談になりますが、鏡の歌は、『古今集』の方が多い。『万葉集』では『古今集』に比べて鏡の歌はぐっと少なくなっており、そのかわりに才の面に映った影をうたったうたがでてまいります。古代、歌を詠む階級は限られておりますが、鏡の普及が、万葉集の時代と古今集の時代とは違う、という感じを持つわけであり、とにかく歌身を資料にしますと、奈良時代まではなんとか、鏡の力というものの、鏡のもっている力に対する恐れというものがうかがえます。

さて、『万葉集』に、鏡のうたは2首くらいしかないのですが、『風土記』の中に一つ鏡に関する極めつけの資料があります。常陸国風土記、久滋郡河内の里の条で「東の山に石の鏡がある。昔鬼がいて、集まって鏡をもて遊び見ているうちに、自ずから去りき」で、恐ろしい鬼でも鏡に向かえば自ずから滅ぶと言う、記事です。これらから古代人の鏡に対する観念はわかるのではないかと、しかも古代人の持っている鏡に対する観念は、現在の我々の意識とそれほどかけ離れたものではない。この時代から千年以上の時間がたっているわけですが、まだまだ彼らの心情は理解できる、と思うのであります。

ここでもう一段階飛躍しますと、古代人が持っております鏡に対する観念、これは当然彼らの行動の上であらわれていなければならない。彼らの鏡の取り扱いの上に当然それはあらわれていなければならないということです。鏡という遺物の遺跡・遺構の上におけるあり方を解釈する場合に、我々が古代人の気持ちをもって見つめれば今までと一味違った解釈ができはしないか、より人間性や文化が加わった考古学的解釈というものができはしないだろうかということが私のこれから

にしていたのではなかろうか。池から考古学的な資料を得ようということは、恐らくできかねると思います。むしろ「影とり沼」の伝承を探して想像をたくましくした方がいいのではないかと、小さな池から石棒類が発見された、という話をきいたことがあります。佐久の山の中の話です。こういう意識があったのではなかろうか、という推定ぐらいはしてもいいのではないかと思います。強調したことは鏡が出現する以前に、靈魂を吸いとる、靈魂をこめるものは、池だとか沼だとか淵だとかいう自然の一部なのだとということです。そこは、人が近づいてはならないタブーの地であります。山の中の静かな池とか沼に「影とり沼」の伝承は割合残っております。縄文時代においてはそこに行かなければ、魂をぬきとられる様なことはなかったということでもあります。

弥生時代になりますと、魂をぬきとるもの、魂をこめるものが、人間の手によりまして、きわめてコンパクトに作られる様になります。しかもそれは特定の個人が所有できる品物となってしまった。これは相当に大きな劃期であります。人の魂をぬきとることができるものが、人間の手によって作られた、それは人間が持てるものであり、しかも特定の個人しか所有することができない、ということでもあります。これが即ち白銅の鏡なので、海の向こうから伝えられました。鏡の歴史につきましては、今日の話とは関係ないので省略致しますが、先日、東京で「大黄河文明の流れ」という展覧会が開かれまして、時代順に中国の遺物が並べられていましたが、その中に金銀の象嵌がされました銅の鏡が1面、展示されておりました。直径30cm近い大きな丸い鏡で、戦国時代(B.C.500～B.C.220)の製品です。その鏡の縁のところには三つの環がついておりまして、これはそこに紐を通してかける鏡台であるか、木の枝であるか、成いは首にかけるのか、すでに中国においては、B.C.500年の昔から存在していたわけであります。日本に伝えられた一番古い鏡は、朝鮮からきました凹面鏡です。この会場にも凹面鏡が展示されておりますが、これは朝鮮の地におきまして、まじないの道具として使われております。凹面鏡ですから人の像は、さかさまに写ります。しかもこの凹面鏡には紐を通す穴が2つついておりますので、手に持って物を写すという鏡ではなく、首か木の枝にかけて大勢の人々に見せる性格のものであります。また、凹面鏡ですから、太陽から火をとるのにも使われました。そういう性格の鏡が弥生時代に日本に伝えられた一番最初の鏡でありました。この凹面鏡は多紐細文鏡と言いますが、問題は誰が持っていたか、ということで、遺跡からのあり方を見ますと、銅鐸と一緒に出ているケースがありますので、共同体の持ち物であったということが思われますが、また、銅剣と一緒に出土したケースや、お墓の中から発見されたケースも知られておりますので、銅鐸よりは個人所有的な色彩が相当に強いと考えられます。つまり日本においてこの鏡は、最初から特定の個人が持っていたものらしいということ、これは恐るべきことかと思えます。続きまして今度は、中国本土から前漢後半の鏡が入って参ります。展示の入口の方に並べられてあったりっぱな鏡で、前漢鏡と呼ばれています。これは凸面鏡で、紐を通す穴が鏡の真中に一つついてあります。凸面鏡ですから顔形がそのまま素直に写ります。この種の鏡はどういう所から出ているか、と言いますと、北九州の甕棺中から発見されています。つまり完全に北九州の豪族が所有していたことがわかります。

余談になりますが、この前漢の時代に北九州に伝わって参りました鏡の中の1面、明光鏡という

鏡であります、そのうちの1枚が長野市の川柳將軍塚古墳から発見されています。これは長野県宝に指定されており会場に展示されています。日本において古墳の中から出土した前漢鏡はこれ1面かと思われます。弥生時代からの伝世品かと思われますが、これが、北九州から大和政権の手にへてこころまでたたらされたものなのか、或いは、始めから畿内にあったものがここへもってこられたのか、また始めからこの北信濃にもちこまれてきていたものなのか今のところは何とも言い難い。これからの考察にまつところが大きいと思われます。

前漢鏡の完形品は北九州のお墓から出ていますが、畿内の方からは破片に加工したものが発見されています。破片に穴をあけてたものが、兵庫県の住居址から発見されておりまして、護符として使われたのではなかろうか、という報告があります。穴があいております破片ですので、紐を通すということが考えられます。紐を通せば当然それは輪になる。首にかけるのが一番普通に考えられる使い方であろうと思われます。つまり畿内においては、ペンダントとして首からかける護符として鏡の破片が使われていたということです。ところで鏡の破片をペンダントにした例は長野県にも1例があります。それは朝鮮から伝えられた凹面鏡を加工したもので、佐久市の社宮寺遺跡から発見されたものです。これも展示されておりますが、裏も表もともにしっかり研磨されておりまして穴があいています。しかもこれと一緒にたくさんの細形管玉と大形の勾玉が壺の中に納められておりました。ということは、佐久から出土した鏡の破片は首飾りとして使われましたがその中でも一番のメインをなすものであった、大きな勾玉と同じくらいに重要な価値のあるもの、大形の勾玉と同じ様な性格をもっているものだ、ということになります。少し飛躍があるわけですが、鏡の破片は首飾りの中のメインをなす勾玉と同じ様な価値をもつものなのだ、ということです。勾玉は古代においては靈魂そのものであるのです。勾玉はイコール靈魂なんだ、特に青色の勾玉は魂そのものであるんだ、というのが古代人の考え方なのです。光り輝く鏡というものは、それを見る人に向かって発動するものです。コンパクトになり個人の所有物になりました鏡には池や沼の水面とは違う、人の魂をぬきとるだけの性格ではない、ある特定の秀れた魂をこめるものである、という新しい働きが加わったのではないだろうか、という気がするのです。

弥生時代の日本のありさまを書いております『魏志倭人伝』によりますと倭人は鏡を好んだとあります。しかし弥生時代に本当に鏡を欲したのは、弥生時代人すべてではない。弥生人の中のは、の一握りの人間達、共同体の制約を脱して英雄になりやがて首長になっていく支配者達に限られていたのではないだろうか、と思います。弥生時代は、階級社会が発達し部落国家が生まれやがては牙馬台国という古代国家ができていく時代ですが、鏡を一番欲した者はその様な部落国家・古代国家の首長ではないか、という気がする。つまり人の魂というものを左右することができる。自分の魂を籠めることができ、それをいつでも発動することができる鏡を、独占所有することによって、農民たちを政治的にだけでなく精神的な面においても完全に掌握できたのではないだろうか。この時代の鏡というものは、この様な大きな働きをするものではなかったろうか、と感ずるわけですね。

『魏志倭人伝』によりますと、景初3年(B.C.239)、魏の明帝は卑弥呼に100枚の鏡を送っています。これは魏の国が勝手におしつけたものではなく、恐らく卑弥呼が欲したものだでしょう。卑弥呼にとりまして大量の鏡は極めて必要な品物で、使い道はもう決っていたのだらうと思います。

なかったか、という気もいたします。それから、ちょっと横道に逸れますが、鏡の直径が大きい、小さいということにも何か意味がありそうな気がしてなりません。有力な豪族ほど有力な首長ほど大きな鏡を持っている。それに対して力の小さい首長のもつ鏡は直径が小さい。例えば長野県の場合ですが、外様大名的な性格をもっている松本の弘法山古墳から出ました鏡の直径は10cm前後、ところが大和朝廷に直属していると言われていた森將軍塚出土の鏡は、三角縁神獸鏡で直径は20cmをこえています。

さて、鏡の分配ですが、交通の要地であります京都府の相楽郡・山城町椿井に大塚山古墳があり昭和28年に、36枚以上の鏡が出土いたしました。全部中国から伝えられてきた鏡で、36面中の32面までが三角縁神獸鏡であります。調査されました京都大学的小林行雄先生は、この古墳の主人こそ全国の首長達に鏡を配付した大和朝廷の使臣ではないか、という推定をされています。彼の手によって配られた三角縁神獸鏡は、畿内は勿論、北九州・中国中部・関東にまで分配されたんだ、ということです。その中には森將軍塚古墳の被葬者も入っております。

善光寺平南半の埴科郡には4基もの前方後円墳が作られておりますが、その中で一番古くてりっぱなのが、森將軍塚古墳です。長さが100m、畿内でもなかなかみることのできない内部主体をそなえております。盗掘されておりましたが、ありがたいことに鏡の破片が残っております。勾玉も出ておまして、4世紀の終りの頃に作られたということが推定されております。鏡はごく小さな破片でしたが銘文のところが残っておりまして、復原致しますと直径20cmをこえる大きな三角縁神獸鏡であることがわかります。これも展示室に陳列されております。鋳あがりの良い鏡です。この鏡を小林先生の分類に照らし合わせますと、鏡式21というのにあたりまして、これは椿井大塚山古墳から出た鏡式と一致しております。卑弥呼が魏からもらってきた鏡は、信濃のこの森將軍塚にも配られている、ということが言えるのではないかと思います。卑弥呼の靈魂をこめた三角縁神獸鏡は、森將軍塚の被葬者のところへも配られている、ということが云えそうだとということです。

埴科郡と千曲川を介して対します更級郡ですが、ここはたくさんの弥生の遺跡があります。条里水田も存在しています。弥生の遺跡や条里水田を見おろす山の上に作られております古墳が長野市の川柳將軍塚です。全長93メートルの前方後円墳で、江戸時代に発掘されてしまっています。遺物がわかっておりますので森將軍塚と比較ができて、森將軍塚よりは約一世代だけ遅れていると言われています。森將軍塚は4世紀後半、川柳將軍塚は4世紀末か5世紀初期。森將軍塚には大和政権に直結していた様相が強く、それに比べると川柳將軍塚は少し性格が違い、極めて在地性が高い。それから、呪術的な遺物が相当にあります。鏡について、川柳將軍塚からは魏の国の三角縁神獸鏡は認められていない。それからもう一つ重要なことは、川柳將軍塚からはたくさんの鏡が出土しております。大塚山古墳からは36面以上が出土しておりますが、江戸時代の文献を見ますと、川柳將軍塚からは42枚もの鏡が出ております。42面のうちわけですが、大型な鏡はごく1、2枚ぐらいいで、ほとんどは直径10cm或いはそれ以下という小さな鏡です。想像をたくましくすれば、川柳將軍塚の被葬者は、大和政権における大塚山古墳の被葬者と同じ様な立場にいたのではないだろうか、川柳將軍塚の被葬者のところに、たくさんの鏡が配られて参りまして、それを受け継いで北信中に

配って歩いたのではないか。

昨年、長野市塩崎で5世紀の住居址の中から鏡の破片が発見されました。内行花文鏡の破片で、川柳將軍塚から出たと言われている鏡の一枚と全く同じもののなのです。その様なところからも川柳將軍塚の性格は考えられないものではないでしょうか。

鏡の配布は3世紀4世紀に限っての事象ではないのでありまして、5世紀に入りましても鏡の配布はあるわけでありまして、5世紀になりますと、中国の南朝から伝えられました鏡だとか、或いは大和の地域で鑄造されました国産の鏡が地方にだいたい配られてきております。さらに信濃においては6世紀に下っても依然として古墳から鏡が出ています。見方によれば6世紀になってもまだ鏡は配布されていたかもしれない、或いは6世紀頃までも前の時代に配布された鏡を伝達していたのかもしれない、という気もするわけです。

ところで6世紀頃になりますと、鏡の性格が少し変わってきます。展示室に巫女の埴輪がありましてその腰には鏡がさがっている。そういう巫女が使うお祀り専用の鏡が出てきました。これはどういうことかと言いますと、もはや宗教的な権力は巫女に渡してしまってもさしつかえないくらい政治的権力は強大になった、ということでしょう。宗教的権力の移認を物語っているのが巫女の持っている鈴鏡であります。それと同時に、この6世紀になりますと石で作った模造の鏡や土製の鏡が出現して参ります。一般民衆が神祀りする時に使う鏡が出てくるわけです。長野市の駒沢遺跡など大きな祭祀の遺跡から発見されております。

7世紀という時代は、中国では隋や唐が興った時代で、日本はさかんに中国の文化を摂取しております。従いまして中国からはたくさんの文物が入ってくるわけでありますがその中には依然として鏡が存在しております。中国から鏡が入ってきますのは何も卑弥呼の時代だけではないのでありまして、古墳時代が終わりました7世紀・8世紀においても日本は依然として鏡を必要としていたのであります。ただし鏡の性格というものはだいたい変わって参ります。鏡の数もだいたい少なくなります。戦前の集成で10数例、現在はその4倍とみて60面くらいは出ているものと思われます。どの様な鏡かと申しますと、海獣葡萄鏡や伯牙彈琴鏡でありますとか、花びらの形をした花文鏡であるとか、瑞花双鸞の八棱鏡であるとかいうものが中国から伝えられてくるのです。7世紀を象徴するのが、海獣葡萄鏡で、鈕のところが海獣になっておりましてあとは全面葡萄がちらばっております。有名なのは高松塚古墳がそうですし、法隆寺の仏舎利と一緒に出土のもすぐれた海獣葡萄鏡であります。8世紀の奈良時代の鏡と言えば花文鏡で、これと一緒に伯牙彈琴鏡が出ております。それから平安時代に出てきますのが八棱鏡で、この様にだいたい分けることができます。

これらの鏡はどういうところから出ているのかと申しますと、お墓の中から出ているケースが割合に多い。私が集めただけでも26例あります。しかし、同じお墓からの出土でも古墳時代の鏡のあり方とは大きく違っておりまして、まづ、古墳時代の様にたくさんは出ない、せいぜい1面出るくらい。1つのお墓に1面です。ただしお墓の中と申しましても本当に遺骸に接して、棺の中にそれは納められているのです。死者の胸の上に置かれていたのではないかと思います。

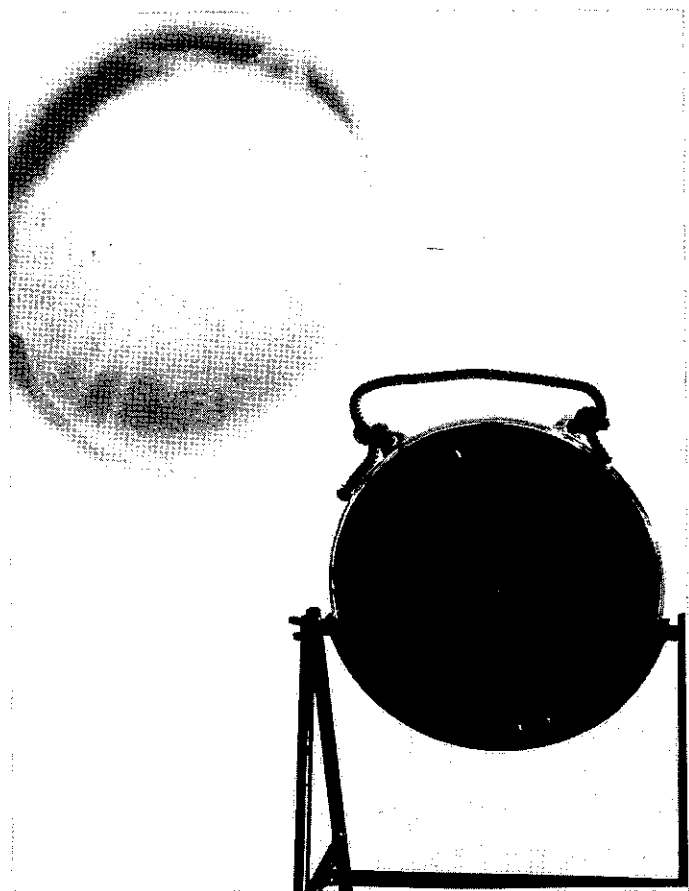
7・8世紀及びそれから以後の鏡の在り方について考えられますことは、自分の靈魂をこめたものではなくて、もう一つの鏡の持っている力、人の魂を吸いとる。死者に災をなすものを吸いとる鏡、即ち、僻邪の鏡に性格が変わっていったのではないかと、ということです。亡骸に災をなす悪い

という方法がとられたのではなかろうかと思うのです。奈良時代になりますと、遺骸は完全に密閉された棺の中で骨と肉との分離を待ったのであります。そういう時に鬼がとりつかない様にと鏡が必要になったのではないだろうか、と思うわけです。

時代が下がれば下がるほど鏡から精神的な用途はなくなり、そしてやがては化粧用ということになるわけですが、とは申せやはりその中には古代からずっと流れてきている一つの鏡に対する恐れというものが存在しているということを感じるわけです。

この様なわけで、僅かな資料を飛び石づたいに用いての極めて雑駁な話となりましたが、古代の鏡の性格の一端を申しのべたということで終わりとさせていただきます。

(昭和61年8月10日企画展記念講演会にて収録)



魔鏡

平滑な鏡面に反射した光の中に、写るはずのない裏面の文様が投影される。その神秘性から魔鏡と呼ばれている。その製作技術は不明となっていたが、無形文化財保持者の山本鳳龍氏の努力により、見事に復元された。

企画展「鏡の文化」に展示投影した。

2 屋敷神をめぐる

佐々木 勝（千葉工商高校教諭）

『農家とくらし』という企画展にあたって「屋敷神をめぐる」という題名でお話しをということでありますので、私の屋敷神との出会い、長野県とのかかわりあい、ということを含めまして少しお話ししたいと思います。

長野県と私のかかわりあいと申しますのは、木曽郡の大桑村が一番最初です。私は学生の時に、人の一生、誕生から結婚、産育、そして死、という生まれてから死ぬまでの人間の儀礼に非常に興味を覚えました。生まれる時の儀礼、結婚する時の儀礼、子供が生まれる時の儀礼、そして死を迎える時の儀礼、こういう儀礼を分析しますと、しだいに人間が人間をどう考えているか、ということが、はっきりしてくるだろうと考えておりました。

学生民俗学会という会が、当時東京の大学を中心に、16校ほどが集まりまして開かれまして、その議長だったもので、各学校の代表と話し合う機会がありました。その時に、千葉の市川にある和洋女子大学の代表の方から、木曽郡を調査している時に、モロキという神様の名前を聞いたけれど、これがさっぱりわからない、という相談を受けました。和洋女子大学の研究会の顧問は鈴木正彦先生といいまして木曽郡と非常に懇意にされている先生だったものですから、その先生のご指導で女子大生が大挙して何年もかかって木曽郡を調査していたわけです。

モロキというのは、普通カタカナで書きますが、漢字にしますと、「室木」とか「諸木」になります。いくつかのお宅では、その下に祝神（いわいじん）と書き、ちょうど家の裏山の山裾のところに^{はこ}お札を置いて祀っている、ということなのですが、当時彼女達は名称だけ聞いて、その小さな祠を目にしていなかったので、どうも何のことかわからないということで、機会があったら調べて欲しいと言われたのです。そこで私は、一体何だろうか、自分の関係する生死にかかわる神様だったら都合いいなあ、と勝手に解釈しまして、後輩と一緒に出かけたわけです。

話が前後しますが、一般に長野県では、屋敷神をイワイデンとかイワイジンといって祀っており、全国的にみまして特徴的なんです。全国的な屋敷神といいますと、青森県あたり、本土の最北端ではイナリ、東北の宮城県を中心としましてはウジガミ・ウチガミとかきこえるんですが、そう呼び、新潟県あたりではホコラ様、群馬とか栃木ではイナリあるいはホコラの名残りでしょうか、ホクラ様。この周辺ではイワイデン・イワイジン様、静岡県を中心としましてはジノカミ様、若狭の福井県を中心としましてはニソノモリ、関西ではノガミ、山陽方面ではコウジン、ここの神様が恐ろしくて、怒ると人が死ぬという言い伝えまであります。山陰ではモリガミサマ、九州ですとキシダケバツソ。これは、たたりが恐ろしいといいます。あるいは、モリガミ様。九州の中部地区では、人の名前のようにきこえますが、コイチロウ神、南九州では、ウチガミを方言で表現して、ウッガンと呼びます。全国を見ますと、これだけ屋敷神が祀られているわけです。形態もさまざまですが、とにかく日本中どこにでも屋敷神はあると考えていいわけです。そしてそれが木曽の大桑村でも顕著にあったわけです。話をききますと、モロキというのは、屋敷神の一つの形態だということがわかったのです。

に摂社とか末社とかがありまして、そこに赤飯がつまんでおいてあり、その赤飯の上の固くなった部分は捨てまして、中の柔らかい部分を、出世するぞと言って私に食べさせてくれた、そんな思い出があります。神様とかそういうものに対して何ら抵抗もなく、そういうものなんだというふうに思っていたのです。父や母も、やはり同じように、どこかに神様があればすぐ手を合わせるという典型的な日本人だったものですから、ちっとも不思議に思わず育ってきたわけです。ただ私の家は、父親が末子で、分家だったものですから、自宅には屋敷神というものは祀っていません。

こんなことで、大学の研究会でいろいろまわるようになりました。その時に、先輩にいろいろ教わります。よその土地に行ったとき石なり、何かを土地の人にたずねる場合は、「これは何ですか」とたずねるのではなく、「これは何様ですか」とたずねなさいとか、あるいは、祠があつて、どういうお札が入っているか中をみたい場合も、必ず手を合わせなさいというように。我々にとっては調査かもしれないけれど、土地の人にとっては信仰なのだからそれを尊重しなくてはいけない、ということのを代々、先輩達が教えてくれるわけです。ですから祠を見て、ことわって、手を合わせて、そして聞くわけです。

大桑村で一番最初に知り合ったおじいさんがおられました。知りあった当時でもう82くらいでした。非常に元気な方でして、木曽川を渡る時、橋がまだない頃ケーブルみたいなものを作ってそこを渡ったという話から、いろいろ教えていただいたのですが、その時に、やはりそのお宅でもモロキ様というのを祀っている、とのことでした。ところが雰囲気でもとも信仰の厚い方のようにでしたから、とてもその祠の中をあけてみせて下さいとは言いにくかったのです。これはモロキ様だと伝えているけれど、お札に何と書いてあるかわからない、との返事でした。それでこちらが見たいなあ、というそぶりを示したつもりだったのですが、口ではどうも見せて下さいとは言えないものですから、「わかりました。写真だけ撮らせて下さい」とお願いして、写真だけを撮って帰りました。その晩は民宿に泊まったのですが、そのお宅が民宿から5分と離れていない近さだったものですから、夜中に後輩と一緒に懐中電灯を持って、4月のまだ雪の残っている田んぼの畦を歩いて行つたのです。誰もいないところで、「すみません」と手を合わせてあげまして、見せてもらいました。そして中のお札を新聞紙の上にのせて、表と裏の写真をとりましてそれからきちんと元にもどして帰ってきた、という覚えがあります。その後、6、7年後にそのおじいさんが亡くなったと聞きまして、お線香をあげさせてもらいに伺い、はじめて霊前で、「実はあの時にあげさせてもらいました」とことわったという次第です。まあ、若気の至りでいろいろやっただんですね。

また、若狭へ行きました時は、ちょっと小高い岩の上に祀ってありまして、それを見るために土地の所有者と一緒に登つたのですが、私は、どういうわけか雨のあとだったものですから滑って落ちてしまったのです。土地の人に、「それはなんかのたたりだ」と言われてしまいまして、これはまずいなあと思ひまして、これからは慎重に歩かなくては、と草靴はやめましてゴム靴にしました。若狭の場合は、木曽とは違い、「たたり」という意識が強いのです。

木曽の屋敷神の形状を模式化しますと、家がありましてその前に田んぼがあり、背後に裏山がある。そして家と裏山の間に屋敷神が祀られているのが非常に多いのです。屋敷神というのは、おも

ろいもので山のてっぺんには祀られないんですね。今だに目にしたことはありません。どうも日本の神様というのは、山の端、山の裾というのでしょうか、そういうところに祀られているかんじがします。

祠がない場合、若狭にはこの形態が多く見られますが、土地の人は一定の区画を神域として意識しています。そして古木や大岩がその象徴として存します。こうした景観をモリと呼ぶのです。祠の存在が当り前のようにになっている地域では、こうした神木が見当らなくなってしまいます。どうも長野県ではこのところに大木があるというのは比較的少ないのですが、これが若狭にいけます。必ずここに大木があり、むしろ祠がないんです。この大木を神木とよくいうんですが、この木の神様が目ざとくやって来て降りられるので、そこにお供えをして祀る、という形が日本の神祭りの形態で、屋敷神もそうしたまつり方なのです。

ここに神様が降りてこられるということになりますと、祭りの前日にこれ(祠)を作ればいいわけですね。ですから比較的古い形というのは、わらで家型を作り、その中にお供えものを置くというのが多いのです。そのあとはそのままそこにほっときましてこのお供えものが、犬なり、猫なり、カラダなりに食べられてもそれは神様が食べたことになる、と解釈しているわけです。ですから早くなくなればなくなるほどいい。翌朝これがなくなっていなければ、神様が気に入ってくれなかったから、というのでもう一度作り直しをしたりするのです。ワラの祠は、まつり捨てといいまして、祀ったらそのまま朽ちてはてるまでほっといていいわけです。ところが、だんだん人間の方が勝手に解釈しまして、神様は常にここにいる、と考えるようになりますと、ここにりっぱなお社^{いし}を作ろうということになります。わらではすぐくずれますので木で作り、それが10年なり15年なりで腐ってきますと回収するわけです。すると次には、もっと大きく作らなければ失礼だ、ということになり、どんどんと大きくなっていくわけです。そのうちに作り直しをするのがめんどろですし、神様にも失礼だということになり、常設というのでしょうか、永久的な祠ということで、石を作るようになります。この様に、次第に古木だけのものや、ワラの祠がなくなって、木や石の祠が現在多くみられる形になっていると思います。ですから昔からの風習をよくとどめている地域では、聖域を象徴する木だけという形態が多いのです。

あとでまとめて申しあげようと思っているのですが、祀る所もそうなのです。最も古い祀り方を規定しますと、だいたい人間というのは、海辺とか谷あいから住むのが普通です。そうした場合、隣りの中国では一族、つまり同じ名字の人々が10軒なら10軒集まって新しい土地を開拓する、という方式をとるのだそうですが、日本では系譜を同じくする一族が入ることはまずないのです。つまり名前が違う3軒なり4軒なりが集まっているわけです。草分け何軒などといいますが、これをムレ(群)と称してもよいでしょう。このムレが分家をもったり移住者を迎えたりしてムレからムラ村)になります。ムレは、一族ではなく違う家、系譜が違います。そして、これらが分家を出すと自然に一族をなしていく、という形になります。はじめに、ここに住みついた人達から自然と分家を出していき、1つのイッケとかマケとかウチワとかいう形になっていくのです。そして、この家は、屋敷神があれば、それをまねして同じ祭神を祀るようになるか、あるいは分家だからいいやということで祀らないようになるか、という形をとっていくのです。ですから古い形としては、恐らく、こういった草分けの何軒かでひとつの屋敷神をもっていたはずだと考えられると思います。

た八達でつづいた祭祀形態と、それから地縁祭祀と呼ばれるもの。ムレからイッケが派生、展開する過程の中で生じる一戸だけの祭祀形態を個人祭祀と呼びます。イッケやマケで祀ったり、個人で祀ったり、草分けと呼ばれるムレつまり地縁で祀ったり、というような形が今の屋敷神にたくさん見られるわけです。さらに、また、ある家やグループの屋敷神が、えらく病氣にご守護があるというふうなことが高まってくると、他からも入れてくれ、ということになりどんどん仲間がふえていく、という形になりますと、必然的に地域全体で祀るようになり、これが地域祭祀と呼ばれるようになります。この規模の大きなものが今の氏神だというふうにも考えてもいいと思います。ただ、今の神社組織になっている氏神とこれが関係あるかどうかは、まだ学問的にははっきりしておりません。しかし、規模の大きい小さいはありながらこういう形式は、地域祭祀と呼んで現在の氏神の祀り方と同じ。うなものだというふうにも考えていいと思うのです。

今お話ししたのは、地縁祭祀・個人祭祀・同族祭祀・地域祭祀の四形態で、現在屋敷神としてみられるもののなのです。しかし、なかなか地縁という形、つまり、ムレで集まっているという形が認識できないために、この地縁祭祀と同族祭祀とが、ごっちゃにされてしまうのです。地縁祭祀の中には同族関係が含まれる場合があるのです。これが非常に、めんどくさいところなのですが、例えば隣同士で、Aという家と、Aの分家だという家が住んでいる。これが屋敷神を祀っている、ということになりますと、これは、一緒に住んでいる、一緒に祀っているということならば、これだけですでに地縁祭祀と考えてもいい場合があるのです。もう一度いい直しますと、ある地域に、Aという家とそれからBという家が入ってきたとします。AとBとは始めから共同で屋敷神を祀っているということになりますと、これは地縁祭祀です。そこへ地続きでAの分家A'がきて、仲間に入れろということ入るとします。こうした場合同族祭祀という概念はあてはまりません。AとA'の関係を強調すれば同族祭祀のようですが、AとBの地縁祭祀にAの分家A'が仲間入りしたにすぎません。そこでこのグループは地縁祭祀ということになるのです。その後Aが、どんどん分家を出て、仲間入りして入ってくると、Bの方が同族じゃないというので、居づらくなってぬけたり、めめたりして、Aだけのグループになって同族祭祀になってしまう、ということなのです。もともとは、同族ではなくて、地縁の場合もある、ということがあるわけです。ですから、マケで祀っているといいながら、違う名字が入っている、という場合は、これに入るわけです。本来、マケで祀ってあっても良かったわけです。長い年月の上に、一つの家でどんどん分家が出たものですから、ケの様な形をしちゃったわけですが、実際は、マケではなかった、という場合もあります。ですから、一見、同族の様な形に見えても実はその歴史をたどると、地縁であったりする場合もある、ということなのです。

歴史的に日本の神様をみると、たくさんおられますが、例えば、山があれば山の神がある、川行けば水神が祀られている、トイレに行けば雪隠神とか、便所神とかいうのが祀られています群馬の山奥あたりでは、ちょうど長野県の七夕につける人形(ひとがた)、こういうものを便所としてトイレに祀るんです。この様に、たくさん神様が祀られています。この神様の名前は何だろう、祭神名は何だろう、と考えられたことはたくさんあると思います。明治になって、各神社で

祀っている神様には名前がなくてはいけないという御達しがあったために、神主さんをはじめとする神職が、古事記あたりから神様の名前を探し出してきて、家で祀っているのはこの神様だというふうに名前をつけてしまったんです。ですから、今、神社では、土地の人はなんとか明神だとか、こだ鎮守さんだと言っているにもかかわらず、……姫とか……命だという名前を出してくると思います。あれには、地域の祀っている人と、神主さんとかがつけた名前とにギャップがあるんです。

日本では、神様の名前というのはもともととはばかれていたんですね。口に出すものではないです。ですから本来は神名というものはないんです。屋敷神についても同じことがいえます。不明であるとか、わからないとかいう方が、より古いと考えた方がいいのです。むしろ、名前がある八幡さんとか、天王さんだとか、諏訪さんだとかいうのは、そういう大社から、お札をいただいてきて、そこから自分の家に祀ってあった屋敷神のところにいたか、それを自分達のところで特に守護神として祀ろうということで勧請したか、とにかくそういう形なのです。昔から伝承的に家で祀っていたのは、本来は名前はないはずなんです。今回のこの企画展を見せさせていただいても、名前がなく特徴的なもののがかなりあります。例えば、チンジュさまというのも、これは、村の鎮守からきているはずですし、ニワの神というのも特徴的です。庭とか土間にあるから、ニワの神と呼んでいるというふうなことです。ウジガミさんとか、イエガミさんとか、これも同じです。全国的に屋敷神を見ていきますとそういう名前が中心なんです。つまり祀られている場所の形状なんです。庭にあるからニワガミさん、家にあるからウチガミさん、それから自分達一族のためにあるということでウジガミさん、といったのです。或いは、性格がとても荒い、すぐ祟るということで荒神さん、土地の神様だということだと地の神さん・地神さん・地主神さん、というふうな名前をつけるんです。それが神様の名前としては一番素朴な段階ですから、私達が地方へ行って屋敷神のお話を聞く場合、そういう名前を土地の人がだしてくれた方に、より興味が引きつけられるのです。つまり、屋敷神のものと形というのは何だろうかということに私どもは、興味があるからです。これが諏方さまだということだと、諏訪神社から勧請したのだろうということで、だいたいかたづくわけです。八幡さんだと八幡さまから、稲荷さんだと稲荷社から、というふうに。この様に勧請してきた屋敷神は、祭日もはっきりしているわけです。天王さんを祀っている場合は、七月に祭りがあります。何々を祀っているという祭神名がはっきりしているほど、その本来の本社の方の祭日を屋敷神の祭日にするということなんです。これが、ニワガミさんとか、ただチンジュさんとか、ウジガミさんとか呼んでいる場合は、意外と祭日もはっきりしていないで、その家で一年の一番適当な寺期に祀っている、ということが多いのです。これを通常は、伝承が稀薄だと考えてしまうのです。祭神名がわからない、祭日もはっきりしない、言い伝えもないということ、それでは一体何だろうか、本当は、もともとはあったのにと考えられてしまうと大変なことになるわけですね。もともとはあったのにと考えると、今の人が忘れたんだ、これはろくに祀ってないのだろうと考えてしまうわけです。祭神名はもともとないのだという前提にたつと、より古いものではないのだろうかと考えられるわけです。勿論、現在の方が興味がなくて忘れた、という場合もいっぱいあります。爺の神様というと、かえって祀っている人は、照れちゃうわけですね。自分の家だけの名前みたいな感じがしまして。で、もともとおじいさんもおばあさんも、その上のおじいさんもおばあさんら、庭の神さんと呼んでいたのに、「何様ですか？」と聞かれて、「庭の神様です」というのが変

いるところが多いのです。そして、この日から、人間が長くなるだけでなく、草木にも伸びていきやうというふうにして、一家中で新しい米を食べて祝う、という形になるのです。この祝う、というほうだけ印象づけちゃいますと、これを屋敷神に供えるのは何故か、という疑問はなかなかおこってこないで、家の祝いごとだから屋敷神にもあげるんだ、というふうに変わってきたりしてしまうわけです。また、新しい初穂のような形で、刈りとったお米をワラのままその屋敷神に供える場合も多いのです。それから、このお米にしましても、これも大桑村で初めて知ったのですが、神の田というのがありまして、一坪から二坪くらいで屋敷神に供えるためのお米を作っているんです。そこでは、神の田は当然個人の家では作らないわけです。何軒かが、一つの屋敷神を祀っている場合に順番で、今年は俺のところだから、来年はおまえのところだ、という形で作るのです。その田には不浄のものはいっさい使わないんですね。せいぜいワラぐらいを肥料にしてお米を作って、できたものを一年間の屋敷神の供えものとする、というふうな形をとっています。大きい神社では、今かえってそういうふうな形をとっています。お田植え祭りなんていうのはその形式と同じことです。

また、大桑村の屋敷神では神の田と並んで、何年間に一度という祭式がユニークでした。屋敷神を5年に一回とか、3年に一回とか、7年に一回とか祀るのです。これは一体何だろうか、さっぱりわからない。一年に一回祀る、ということならわかる、ところが5年に一回ないしは7年に一回とは、一体どういうことなんですか、と聞きましたら、その屋敷神の供え物をおく桶が決っていて、そこに収穫したものを入ると、だいたい7年でいっぱいになる、とこういうわけでした。或いは、5年でいっぱいになる、その時にお祭りをするんだ、というわけでした。昔から祭りの方法を同じくしているかたは、その時に御岳山の行者を呼ぶんです。そして、湯立てなんかをしますので、その時の経費に使うわけです。そうしますと、5年間たまった費用でやるということなんですが、ところが、お米を主体にした場合は、一年間が必ず一つの単位なんです。ですから、トシ(年)というのは一年をあらわしている、といわれています。それが3年なり5年なり7年を一つの周期にするのは一体何だろうか、ということです。一年間、1月から12月までを一つの周期にする、ということはよくわかりますね。これは、現在我々の生活のくぎりになっているわけですね。ところが3年をひとくぎりにする、5年をひとくぎりにする、ということになると、ちょっと違うではないか。ということは、これは稲作農耕を基準とした、土台とした信仰とはいえないのではないかと疑問がわいてきます。それで非常に困ったわけです。ところが、日本では大きな文化要素を二つ考えてもよさそうです。一つは、稲作農耕いわゆる水田です。もう一つは、焼畑農耕です。焼畑は木曾だけでなく、日本で山地のあるところではほとんど行われています。顕著なところでは、中国地方とか四国とか、戦前までは焼畑をやっていた地域がたくさんあるわけです。私がずっと行っていた大桑村でもかなりやっていました。この焼畑を中心にして考えてみますと、山を燃やして一年めはそばを作り、二年めは大豆を作り、三年めは何々を作るということになると、収穫の周期は3年なり5年なり7年ということになってくるわけです。水田ですと、植えてから収穫まで一年周期でできます。ところが焼畑では、一つの畑を利用する年限は3年なり5年なり、非常に条件の良いところでは、途中でワラばいなんかをいれまして7年ということで。これは焼畑文化圏で

の屋敷神と考えるとよさそうだ、ということになります。文化要素が違うといろんな大きな問題が生じてくるのですが、屋敷神に関しましては、焼畑耕作でも、水田耕作でも、人々が自分の作っている作物がより多く収穫できるように、そして家族が無事なようにと祈るのは同じなんです。

自分がたずさわっている生業の形態が違っていただけであって、屋敷神を祀るという意識は同じなのです。たまたま先祖代々水田にたずさわってここまできた、たまたま山地が中心だから焼畑文化圏で自分はすごしてきた、というだけの違いで、屋敷神を祀るという意識は同じで、屋敷神を祀るその様式が変わってきただけなのだ、ということになるのです。こう考えると、日本全国に屋敷神が祀られているということが納得できるのです。

今まで屋敷神にこだわってずっと話しをしてきたわけですが、ここで違うお話しをしたいと思います。日本で屋敷神を考える場合、日本人の信仰というものは一体どういう特徴をもっているのか、そういう大きな視点からみてみないと屋敷神の本質は見えないであろう、と考えるからです。

今現在、日本人にはたくさんの信仰、既成の宗教があります。私どもは宗教と信仰を区別しまして、宗教というのは教会、教典、教祖がなくてはダメで、信仰の場合は、そういうものがなくてもただ太陽があたれば一日暮らせる、ありがたいと思って手を合わせる、これが信仰である、と区別して考えるわけです。そうした信仰の中心は何だろうかということ、現段階では祖霊信仰です。祖霊信仰をひと口で説明するわけにはいかないのですが、この前段階あるいは中核となったものに靈魂信仰というのがあります。靈魂信仰というのは、肉体と霊とは別だという考えに基づいた信仰です。これはもうほとんど万葉の時代から、それ以前といっているのですが、その頃からあります。例えば柿の木が家にあって、収穫できるおいしそうな柿がなったので、とって家で食べようとする時、一つだけ残しておくのですね。鳥のためにとかで一つだけ残しておくところが。あれは昔でいうと「キマブリ」というんです。つまりその柿の木の魂だということです。それから、我々の言葉にも魂が入っている。肉体には勿論そうですが、言葉にも入っていると考えるのです。言魂などと呼ばれます。正月に芸能者がやってきて一所懸命家ほめをする、田ほめをする、というのは、これは言葉の力でその家が繁栄するように、田んぼに実りが多いように、ということです。ですから上棟式の時もやるし、子供が生まれた時にもその子供をほめるといような芸能が発達しているわけです。それは、その言葉のもっている魂でふるいたたそうということであつたのです。

魂と肉体は違うんだという事例はたくさんあるのですけれども、古代の日本人といいますか、つい最近までの日本人は、病気を魂が安定していない状態である、というふうに捉えてました。従って子供がひきつけをおこした時どうするかといいますと、臼をもってきてそこへ子供をたたせまして、ひしゃくで魂を入れるまねをするという事例があります。そうしますと、子供がひきつけをおこしているのは、魂が身体から出かかって安定していないからで健康ではないんだから、魂を鎮めて安定させる、という考え方なんですね。臼を使うのは何故かといいますと、これがおもしろいんですね。桃太郎の話で、桃を川から拾ってきて、普通はまな板に置いて、ぱっと切っちゃうんですが、そうではなくて、昔の話ですと、それを臼においとくのです。臼の所においておいて、ワラをかぶせて一日おいておくと、桃が割れて、桃太郎がでてきた、という話があるのです。この話を考えますと臼の上に桃をおいてワラをかぶせるといった状態が靈魂を熟成させる状態、味噌なんか

不思議なことに、家人が枕もとでその人に向かって呼ぶのなら話は別なのですが、井戸の中に向かって大声を出して呼ぶとか、屋根の上に登って大声を出して呼ぶとか、枕もとでも、こっちに向かって寝ているのに、違う方向に向かって呼ぶとか、という事例がたくさんあるんです。これは何か、というのと亡くなった状態というのは、靈魂が肉体から離れた状態だから、その靈魂を呼びもどすために大声を出す、というのが「たまよばい」のもともとの形であろうというふうに考えねば解決できないわけです。肉体から離れる靈魂を呼び戻すというたまよばいの風習はしだいに消えつつありますが、いまだに続いているのは、亡くなった人の胸なり頭のところに、ハサミやナイフをおきますね。あれは普通、亡くなったということは、その人の靈魂が肉体から出ていってしまうものだから、そこへ悪い霊が入ってこないように、ということでナイフとかハサミを置くわけです。これ一つをみても、人間の靈魂が出てしまうという感覚が、解説は違っててもいまだに続いていることがわかります。この歴史の長さは、やはり偉大と称するのでしょうか。人の気持はなかなか変わらない、と考えてよいのでしょうか。いずれにしても現代まで続いているのです。

また、女の人の子供をなした時に、非常に力が果てます。これは鳥取の例ですが、妊婦の大きなお腹に対して、ほうきで掃くまねをします。要するに、靈魂を集める、というまねをするということです。ほうきには掃き出すというのと、集めるという両方の作用つまり両義性がありますが、この場合には、集めるという意味に使われています。それが逆に使われると、今度は、客が長居した場合には、ほうきを反対にたてて隣の部屋にたてておく、なんていう話もあります。智恵なんでしょうね。出産は魂が出たというふうに考えますから、すぐに食べるのはかうどんとか力餅で、靈魂を補強するという形です。同じような感覚で、「安倍川餅」というのがあります。黄粉餅なんですけれど、実際は、大きな川、安倍川という川がありまして、その川を渡る前に自分の靈魂を強くしておこう、今で言えば栄養補強しておこうということで、餅を食べて大きな川を渡るということです。ですから、今でもその風習が残っていて、峠の茶屋には必ず餅やまんじゅう的なものがあるようです。要するに、大きな峠をこえてきて力がなくなったということは、靈魂が不安定な状態だから、そこで餅を補強する。餅というのは、古代から靈魂と一緒に感覚で捉えられますので、それを食べて補強しようというようなことがあるわけです。

こう考えますと、すべて、この靈魂感覚、靈魂観で考えていかないといけない、ということです。この靈魂には二通りの捉え方がありまして、やっぱり霊となりますと、良い霊と悪い霊を考えるのが人間の常です。善霊と悪霊というのがあります。日本人の神様とは、一体何だといいますと、ないわけで、霊なんですね。それで「神霊」と呼びます。当然それは、人間にとっていい作用をするものですから神さまになります。ところが悪い作用をする場合は、ここでは厄神と代表させます言葉は違って鬼でも悪魔でも、抱瘡神でも、厄病神でもいいわけです。どちらかという、屋敷神は我々にとって頼りにしなくてはならない、頼りにしてもだいじょうぶだ、という神だということになります。ところが逆に、絶対に我々の中に入れてはいけない、という神霊があるはずで、長野県でもっとも特徴的な「カニカヤ」という風習があります。正月六日でしたか、安曇野あたりが中心だと思いましたが、カニを門口にさして飾っておくんです。最近では沢ガニがいな

くなくなっちゃったものですから、小さな紙にカニと書いてそれを門口に貼っておきます。これは全国的に見ましても、長野県が特徴的で他ではちょっと見ないものです。他でみるのは、節分の時に、ひいらぎにいわしの頭をこがして門口につけるヤイカガシです。あれは一体何だろうかと、いうとどう考えてもあれは、門口においていやなものがこないように、という象徴なんです。ひいらぎの葉は尖っています。いわしの頭は焼けばくさいものです。おまけに、念を押したことに、家の近くの農家の家では、あれに、ツバを吐きながら焼くというんですね。それを見ますと完全に、イヤなものが来ないようにということです。農家にとってイヤなものとはへびとか或いはスズメとか害虫ですね。それを名指しで、ツバを吐いて焼いているのです。

実際に、具体的には、害虫であったり、害鳥であったりするわけですが、それが霊という段階だと悪霊とか邪霊になるわけですね。もっとも、本来は人に災厄ををなす象徴として悪霊や邪霊があり、その具象化として害虫や害鳥があてはめられたと考えるべきでしょう。それはともかく、この悪霊の見方を、やはり具体的に見ておいた方が、いい神様を迎える迎え方と、悪い神様を迎える迎え方を対比して考えるのに、よりわかりやすいのではないかと思います。

例えば、岡山県に不思議な話があったんです。おおみそかに、物干し竿を外に出したままにしておく悪魔がきてとまるので必ず家にしまい入れる、おおみそかには洗濯物を干すのでさえ嫌う、とこんな事例がありました。これを読んだとたん、何だろうと思いましたね。おおみそかに、悪魔がやってきて物干し竿にとまるなんて。悪魔という言葉から、どうも日本的なものではなくて、外国的な雰囲気も感じて、本当に日本の事例なんだろうかと考えてしまったのですが、調べてみると、こういう事例がかなりあるのです。

同じ様なのですが、一月六日の夜には厄病神、これを鬼と呼ぶ人がいるというんですが、鬼が屋外にあるものに残らず判を捺して帰るというんです。捺されると病気があったり不幸があると恐れ、身に着けるもの、特に履物類は宵のうちに全部残らず屋内にとりこむ、またなるべく夜は出ないようにする、というのがありまして、それからもう一点、年越しには外へは草履などをおいておいてはいけない、悪魔が入り込むといって夜は外にあるものを全部中に入れる。同様に、節分にも、ものを外へはおこな、履物を置いていれば鬼が履いて逃げると言って嫌った、という伝承があります。これが不思議なのは、節分とか、一月六日とか、おおみそかとかと、全部が年の変わり目と意識されている日なんです。こういうときに、悪魔とか、鬼とか、厄病神とか、要するに厄神が来る、とされるんですね。そうしますと、先ほどのひいらぎとかカニカヤの説明もだいたいついてくるんです。ねらいは同じで、ただ表現の仕方が、長野の安曇野を中心としたところはカニカヤで、他の地域ではヤイカガシということで、両者は同じ役割をしているんだろと考えることができるのです。

おもしろいのは、これを集約しますと、ある特定の日に、つまり特定の日というのは、年が変わる日に異郷から人々に災厄をもたらすものがやってくるから用心しなさい、といういい伝えなのだということがわかります。やってくる日については、おおみそかとか、節分、いづれも年越しといわれている日です。一年のサイクルでいえば、正月という年の変わり目であるわけです。やってくるものは何かというと、悪魔とか鬼とか厄病神とか表現されるいわゆる異郷人、ストレンジャーなんです。夜、人々の生活空間を這い廻る、その時に履物や衣類などを屋外に出しておく、後日そ

う一時代前には、主々嫌われていた厄神、八咫鏡として、それに代わって厄神として、厄神を前をつけるのです。現に、一軒だけここでも疱瘡神を祀っている、というのがこの表にありましたけれど。こういう忌まわしいものでさえ、神霊の働きと考えると神とか様をつける感覚は、現在でも生きているわけです。

そこで少し現在のことについてお話したいと思うのですが、悪魔がくるので履き物などを外へ置
てはいけない、というのは災いをもたらす厄神が、年の始めにやってくるので、身につける物を
屋外に出しておいてはいけないという禁忌なわけです。物干し竿というのは衣類を干すから、干し
竿までも出しておいてはいけないというのであって、本来は衣類に問題があるわけです。履き物にも問題
があるというのは、共通するのは我々が身につけるもの、ということです。それで考えますのは、
厄年の風習です。厄年の時に、日頃、身につけている手ぬぐいとかワラジを形代^{かたしろ}として道の辻など
に捨てて厄落としをする、ということがかなりの地域で行われています。この厄とか、穢れとか
いうものは、年々附着するもので、人間についてきてしまうものなのです。それを履き物とか衣類
などの形代につけて流したり捨てたりして厄を落とす、という考え方が厄年の考え方です。

これと同じなのが、ねぶた流しです。あの青森県で非常に大きな祭りになっちゃっているもので
すから、実際の意味はわからなくなっていますが、あれは眠たさを流す、ということです。ちょ
うど一番働かなくてはいけない時ですから、疲れて農作業をしているときでも眠くなるので、そ
れを人形（ひとがた）につけて流して捨てる、ということなのです。今の神社なんかでも、大祓を
する系統の神社ではこの人形を渡して名前を自分で書いて収めるとそれをおはらいしてくれる神社
がたくさんあると思うのですが、同じことなわけです。また、長野の特徴的な七夕、笹につける人
形^{ひな}はこれを示しているということです。

自分の悪いものをもってそして流すというのは、七夕の笹につける人形です。これは、他ではほ
とんど見られないために、長野県の非常な特徴となっているわけです。もともとは、ねぶた流しと
同じだというふうな結論をだすと非常におかしいことになるんですが、実際はそういうふうに考え
てよいと思います。

また、御雛様も同じことです。子供は、靈魂が安定しない非常に不安定な時期なので、すぐ病氣
になったり死んだりする、という感覚ですから、子供を寝かせておいてそこに人形のものを置いと
けば身がわりになってそちらに厄がつく、ということで人形を抱かせて寝かしたものでしょう。そ
れが、最近は御雛様をきれいにしてお飾りしてしまおう、ということで意味がわからなくなっておめで
とう、なんてことになってくるわけです。厄除けと同じ感覚で考えていいということなんです。で
すから、先ほどの身につけるものを外へ出してはいけない、というのは、これの逆を考えていただ
ければいいわけです。厄落としとは逆に、厄神の来訪する時に履き物や衣類などの形代を屋外に出
しておく、それをあとで身につけた者は病氣になったりするというふうに捉えるので、悪霊が
くる日には自分の身につけるものは外へ出さない、というふうな伝承が、現在の日本では突拍子
のない伝承の様に聞こえるわけです。悪魔がやってきて物干し竿にとまる、なんて一つ一つとると
なんだかさっぱりわからない事例として考えてしまうんですね。こういうものを私は形代禁忌と勝
手に名前をつけました。それにもう一つは外出禁忌と呼びまして、この日は絶対に外に出てはい

けない特に夜は外に出てはいけません、というタブーがあるわけです。この2つの要素からさっさと悪魔の事例は成り立っているわけです。

おもしろいのは、これは、新潟県の事例なんですが、旧暦の二月九日を厄日といい、山に行く怪我をしないと休む、そして山の神様が山をまわる日といい、山でぐずぐずしていると頭から木がはえて、数えられたらもう人間にかえれない、という事例があります。これも考えてみれば外出禁忌なんです。山の神様といいますから、いい神様のように聞こえますが、実はよくないから外へ出てはいけない、という禁忌がつくわけです。

同じように、外出禁忌の事例で、読んでいてびっくりした記事があったんですけど、これは岩手県の事例です。『歳時習俗語彙』といって、日本民俗学を作りあげた柳田先生がまとめられたものですが、この中に、陸中下閉伊郡には、二月九日を“おかたぼん出し”といって“おかた”というのは奥さん、“ぼん出し”は追い出すということで、即ち女房を追い出す日、と呼んでいるところがあるのです。嫁を親里へ遊びにやる日ですが、「土地には人を笑わせるような解説も伝わっている」という注意書きがありまして、「昔は二月九日でないと女房を出すことができなかった、この日に出されたものは、どんなわびごとをしても許されなかった。」というんです。だから一人もので、奥さんが欲しければ、二月九日の夜、十文字即ち道の辻にいけばいくらでもみつけれられた、という言があるわけです。これだけ読むと何のことかさっぱりわかりません。外出してはいけないといのに、女房は追い出せる日ということになっているとは。で、おかしいのは、そのあとに柳田先生自身が書かれたかどうかははっきりしませんが、「もとよりそういう由来譚を信じている者はなかったであろう」とわざわざ注釈をつけているのです。全くの冗談だとわかっていながら、由来のないものに果してこういうものが生まれるかどうか、そこが問題で、ただ信じる者がいない由来譚であっても、この話が生まれたという背景には何らかの事情があったのではないかと、こう考えるわけです。おかたぼん出しというのは、女房を家から追い出すという主旨からすれば、外出禁忌とは全く違います。出しちゃうということですから、行くなということとは違います。しかし内容のものに不自然さがあります。わざとおかしくするためにあとでつけ加えたものと思われますが、おかたぼん出しが二月九日というふうにならないうちに日が決まっている、ということですが、嫁の里帰りの機会であったにしても、二月九日以降急に農作業が忙しくなるわけではありません。むしろ、二月九日や年越しになんらかの意味があってその日の習俗を説明するためにこういう笑話ができただろう、と考えた方が自然だと思います。同じ本の中に、“かきやさら”というのがありまして、これは、青森県の三戸郡で二月九日に“やさら”といい、村によっては“かきやさら”という厄除けをする日だと伝えられています。宮城県の大田原郡では、“つぼだんご”と称して、だんごを鍋のふたに盛って台所の棚にあげてから食べる、という事例があります。二月九日の事例です。そして同じやさらの項目に、奥羽の八戸のまわりの村では、二月卯の日、もしくは九日と十五日の日に、このやさらという行事があった、とあります。二月九日と十五日とは女人の悪日といって以前は外出しなかったんです。だんだん外出禁忌に近づいてきたわけです。一方は、出しちゃえという日で、一方は出してはいけないという女人にとっては悪い日だったということで出さなかった、ということ、この日出すと女性には都合が悪い、つまり、弱い者をこの日出すとよくないということで、悪いものがくるのであろう、と考えられるんです。東北地方では、この2月8日とか9日のこと

って里へ帰るべき日に変化したのだ、というふうに考えるわけです。そして地域慣行として、2月9日の里帰りが定着すると、その由来譚として、笑い話として、2月9日は、女房を追い出す日ののだ、と男の側の論理としてこういう話が生まれてくるのだ、ということになってくるわけです。もう一度、しつこくおかたばん出しの伝承に触れておきますと、おかたを欲しければ、つまり女房を欲しければ、この夜十文字、即ち道の辻に行っていれば、いくらでもみつけれられたという記述がありました。この感覚に興味を覚えるわけです。つまり、夜や道の辻という要素は、そのまま厄神がくるという時間と空間を示しているということなんです。富山県の婦負郡（なほ）の事例として、「昔、道の辻は夜一人で通るものではない」というのがありますが、こうした感覚は各地に伝えられています。我々にとって嫌な神霊は夜間に道の辻にあらわれる、というふうに昔から考えられていたんだと思うわけです。ですから、村に通じる道の木のところへ、へびの形をしたワラで作ったへび、村の外に向かって、カーッと口を開いた様な恰好をさせたものを作っておくという事例が広範囲に見られます。で、この体には、先程の、ひいらぎとかくぬぎとかの厄神が嫌うだろうと思われる匂いの強い、葉の尖ったものなどをさしておくわけです。村に通じる道々に全部同じように大へびをにかけて用心している、ということです。村境に嫌なものを置いて家の門口にもひいらぎだのカニヤだのを置いて、二重にも三重にも避ける、というような感覚で行事を行なっている、というふうに捉えることができるのです。

回避しようとするだけでなく、さらに進むと厄神に攻撃するという民俗事象が見られます。攻撃にはどうするかと言いますと、年の始めになると村境に行って鉄砲をぶっぱなすわけです。この時に驚いて厄神はこないだろう、というのです。それから、出産時に、弓・弦をならすというのが巻物にもありますが、弓をつがえて村境に置いておくのです。それは、出産する時は当然、死ぬきと同じように嫌な霊が入ってきては困るので、その弦をならして防ぐ、ということなのです。そして同じ様に、村の中に嫌なものが入ってこないようにその矢を放つ、というのです。ですから、家をたてる上棟式の時に、弓を張っておく、なんていうことが今だにみられるわけです。これも家に向かっては絶対にやらないわけです。大事な家を建てるので嫌なものを寄せつけては困るので、わざわざ外に向けて弓を張っているのです。この様にどれも同じことで、今まで厄神が入ってこない様に一所懸命守っていたのが、今度は、守るだけでは物足りなくて攻める、というふうになるのです。矢を持ったおじいさんが、その日、2月9日でしたか、一生懸命一振り家の前でする、なんていう事例があるくらいです。

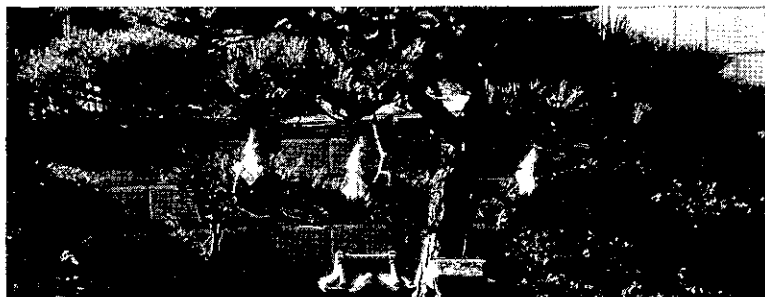
こう見ていきますと、一生懸命迎えようとする神霊、ここでは屋敷神を代表させましたが、それに対して一生懸命排除しようと努力する神霊、厄神の対比が見えてくるのではないかと思います。迎え祀る・追い払うという行為の意識は同じです。その対象物が、我々に幸をもたらすということで迎え祀ったり、我々に災厄をなすということで追い払うのです。結果的に何をするかというと、結局は実体はないものですから、象徴的なものにかかわってきます。弓をひいて来ないようにする、とか、赤飯をおいておいて、犬が食べても何かが食べても神様が食べたことにする、というふうな形で見ている、という歴史が今まで繰り返されてきたということなわけです。

ですから屋敷神をみる場合にしても何にしてもそうですが、ある民俗事象を考える場合、それ
対峙する事象を分析してみて始めて両方が浮かびあがってくるだろうということで、今日は厄神
というか悪い方の神様をお話ししてみたわけです。

また、機会があれば、と思うのですが、本日はどうもありがとうございました。

(昭和62年3月21日企画展記念講演会にて収録)

自然石を御神体とした屋敷神
(春日様)
中御所町九反
篠原竹雄氏宅



年 報 VOL. 5

—昭和61年4月～昭和62年3月—

発行 昭和63年1月30日

編集 長野市立博物館
発行

